

演劇禁止令

作・演出 萬野 展

登場人物

佐伯朋子 近永鞆子を演じる劇団員。座長。(石田)
町田景子 美世子を演じる劇団員。(武藤)
広瀬丈^{たけし} 看守Aを演じる劇団員。(有原)
秋山真弘 白塗り男を演じる劇団員。(村上)
島村駿夫^{はやあ} 看守Bを演じる劇団員。(早矢仕)
山下志津江 劇団員。(横川)
ムングン・ゲレル 喫茶「小山内^{おさない}」マスター。演劇密売人。(河野)
近永晶子 近永鞆子の孫娘。(杉山)
坂本彩^{あや} 看守を演じる劇団員。喫茶「小山内^{おさない}」のバイト。(土橋)
竹内亮子 警察官。(加藤斎)
根岸希典 警察官。(斉藤)

ACT.1 劇中劇

暗がりの中、
椅子に座った女がひとり。

周囲には布のかたまりのような黒いものが複数、がぼんやり見える。

女
まだ薄暗いうちに私は目が覚めた。ここはどこだろう。私はここでなにをしているのか。答えはない。硬く冷たい床が私の裸足の足を押し返す。寒くもなく暑くもなく、何の物音もしない。

ここはどこだろう。私はこの暗がりの中でなにをしているのか。身動きひとつせず、まだ遠いところにあるような自分の体を手探りで確かめながら、私は私に繰り返す。

ここはどこだろう。私はここでなにをしているのか。まるで死に絶えた枯れ木に嘴を立て続ける啄木鳥きじつぎのように。繰り返す。ここはどこだろう。あのうすぼんやりした光はどこからくるのだろう。今は朝だろうか。それとも夕方だろうか。なぜ私は私の手足が動かないのではないかと恐れているのだろうか。それが恐ろしくて手足に力を入れることができない。

ここはどこだろう。なぜ私はひとりでこっぴつしているのか。誰もいない薄暗い場所
でなぜ私は目覚めるのか。ここはどこなのか。今はいつなのか。
そしていつものように、どこからか声が聞こえてくる。

声
：頭から流れる血が、顔から肩へ、背中へ、胸から腹へ伝わって、どす黒い血痕をつけている者は数知れない。

両手をだらりと垂れて、人並みに押されるまま、よるめきながら歩いている者。
目を閉じたまま、人並みに押されてふらふらしながら歩いている者。

老人を背負った中年の男。
病氣らしい娘を背負った父親らしい男。

泣きじゃくりながら両手で眉庇をして行く跣の女。

顔じゅう血だらけにした裸の赤児を後向きに負って、殆ど裸体で歩いて行く若い女。

声とともに、黒いかたまりがいつせいに動きだし、立ち上がり、歩き出す。
血まみれで、襪襦布をまとった、異様な姿をした男女。
椅子に座った女のまわりをゆっくりと歩く。

女
私は本当に目覚めているのだろうか。私はまだ夢の続きを見ているのか。それとも夢と現実のはざまを、止まりたくても止まることができずに嫌々ながら揺れ動いている振り子のように、行ったり来たりしているだけなのだろうか。これは誰の記憶なのか。これは本当に私が見たことなのか。この風景のなかのどこかに私はいるのだろうか。

声
子供の手を引いていて、人並みに押されて手を放した親爺。

柱時計を捧げるように持って、ぶるんぶるんと音をさせながら歩いていく男。
顔、胸、腕が血だらけの女の腋を抱き、引きずるようにならして連れて行く中年の男。

乳母車に荷物と子供を乗せた婦人。
いきなり人並みに巻き込まれ、乳母車は押しつぶされ、そのうえに後に続く二三十人が将棋倒しに倒れていく。

声
私は知っていた。もうすぐ答えはわかる。それは私にとって恐ろしい答えだ。いつ訪れるかわからない、でも、それは確実に訪れる答えだ。すぐに。いつもそうだ。いつもこの風景だった。そしてもうすぐ、白い顔の男が出てきてしゃべる。私にはわからない言葉でしゃべる。そうしたらすぐに答えがわかる。振り子は止まり、私は自分がどこにいるかを知る。私がなぜこんなに薄暗い場所で見覚めるのかを知る。なぜひとりでここにいるのか、そしてなぜあの薄暗い光の刺す小さな窓には鉄格子が填まっているのかを…。

奇妙に寸法の合わない服を着た、顔を白塗りにした男が、奇妙な節をつけながら、踊るような動きとともにしゃべる。

白塗りの男 皆さん、戦時御多用の折から御苦労さまであります。今更申すまでもなく、みなさんの連れて帰られる怪我人は全身が火ぶくれになっているということでありますから、怪我人に対しまして、より以上の苦痛を与えさせないよう御注意のほどをお願いする次第であります。敵はいわゆる新兵器を使いまして広島市の上空を襲い、幾十万にも及ぶ広島在住の無辜の民を一瞬にして阿鼻叫喚の地獄に晒したということでもあります。広島から逃げ帰った挺身隊員の話では、新兵器で広島町が潰れたとき、『助けてくれえ、助けてくれえ』と泣き叫ぶ声が、その幾十万人も声が、さながら地の底から湧き起こってくるようであったと申されました。戦争とはこのようなものと胸を締めつけられる思いであったと申されました…

女
思い出したくない。ここは私が目覚めたい場所ではない。今は私が目覚めたい時ではない。それでも私の本能が、ききわけのない子供の泣き声のように繰り返し繰り返し繰り返し問い続ける。

ここはどこなのか。いまはいつなのか。私はなぜここにいるのか。私は、私は、私は、

白塗りの男 …しかし、いずれにしましても戦争が行われていることは、まぎれもない事実でありまして、みなさんは勤労奉仕団員として戦友を迎えに赴かれるのでありますから、撃ちてしまふのしるしとしてお持ちになっておる竹槍だけは、決して落とさないように御注意のほどをお願いするのであります。

今、みなさんを見送るに際しまして、朝まだきの暗がり、明かりもつけず壮行の辞を述べるのは甚だ残念であります、時局がらご了承をお願いするものであります…

おどけた動きで陽気にしゃべる白塗りの男の演説をかき消すように、地鳴りのような不気味な音が高まっていく。

椅子の女は近づいてくる覚醒への恐怖で声にならない叫びをあげている。

白塗りの男 …それでは、勤労奉仕団員の壮途を送るため、万歳三唱をお願いいたします。では。

白塗りの男が、音頭をとるように両手を振り上げる。

不気味な音楽は最高潮に高まる。

椅子の女がついに悲鳴を上げる。

音楽が切り替わる。
黒い影たちは黒い布を脱ぎ捨て看守のような姿に変わる。
バネが弾けるように椅子から飛び出して立ち上がる女。

女 いやだいやだいやだいやだ！！ 出して！ 出してよ！ ここはいやここにいたくない外に出して！ 出して！ 出して！

ラジオ放送のような音が遠くで聞こえている。
看守たちは女を取り囲み取り押さえる。
猛烈に反抗する女。

女 いやだ！ いやだ！ ここから出して！ 出して！ あたしは、あたしは…

女は掴まれた腕をふりほどき、やや離れたところから睨みつける。

女 ……あたしは、狂ってなんかいない！

看守は再び女に迫り、手にした警棒のようなもので女を容赦なく殴打する。
女は獣のように暴れ叫びながらも、ついに床に倒れ伏す。

動かなくなった女をなおも殴り続けるが、やがて一人が注射器を取り出し、気絶した女の腕に針を突き立てる。

男女は一言も発せず去っていく。
ラジオの音が聞こえている。

暗くなり、明るくなる。
倒れた女のそばに、もうひとり女がいて、倒れた女を覗き込んでいる。

もう一人の女 朋子………朋子…！

女 ……

もう一人の女 ああ、気が付いた。だいじょぶ？

女 ……

女は意識を取り戻す。おびえたようにあどすさる。

もう一人の女 なによお、すごい顔して…。あたしよ。

女 ……

もう一人の女 あたしだってば。美世子。

女 ……み、よ…

もう一人の女（美世子） どうしちゃった？ 悪い夢でも見た？

女 ……夢？

美世子 あんたって寝ほけるよね、よく、子供の頃から

女 ……美世子…ミヨちゃん…？…ミヨちゃんて…勝浦の……？

美世子 だから勝浦じゃないの。もう、やだなあ。聞こえない？

美世子の指さす方には窓があるらしく、その窓の向こうから、静かな海の波音が聞こえてきている。

女は立ち上がり、窓を開ける。

波音が高まる。

女（朋子） ……勝浦の…おじさんの……ここ、旅館…？

美世子 そつよ。あんた昨日から泊まりにきているのよ。旅館でいってももう十年も営業してないけどね。あんた、ここ来るの久しぶりでしょ。

朋子 ええ…そうね…でも、昔のまんまだわ…
 美世子 お母さん、頑固だからね。こつやってあたしら一族がたまに別荘がわりに使うだけで他にはなんにも利用価値のないのに、毎週ちゃんと家の手入れしてるんだから。十年間ずっとよ。
 朋子 …おばさん、元氣なんだ。
 美世子 殺しても死なないわよ、あのヒトは。…ねえ、あんただいじょうぶ？
 朋子 ……夢だったのかな…。…血だらけの人たちが…たくさん歩いてた…男の人や女の人や、子供や…
 美世子 ふっん…。
 朋子 それから…誰かが…誰だろう…誰かが来て、踊りながらしゃべってた…
 美世子 踊りながら？
 朋子 とつても変な動き…ふざけてるみたいな…でも…
 美世子 ……なに？
 朋子 怖いよ…すごく怖い…
 美世子 ……。
 朋子 別に怖い顔してるとか…怖いことをしゃべったりするんじゃないの…どっちかって言つと、しゃべりかたも、動きも、剽軽で、ふざけてるみたいで…でも怖い…。夢の最初から、いつかその人が出てくるのがわかっていて、だんだん近づいてくるのがわかっていて…それが…気が狂いそうに…怖い…。
 美世子 どんなことしゃべるの？
 朋子 ……思い出せない。いつも…何度も聞いているのに…
 美世子 ぜんぜん？ 一言も？
 朋子 ……
 美世子 ……まあ夢なんてそんなもんよね。
 朋子 ……テイシンタイ…
 美世子 え？
 朋子 テイシンタイ。…一言だけ、頭に残ってる…
 美世子 ……テイシンタイ？
 朋子 ……意味も字もわからないけど、音だけが残ってる…
 美世子 ああ、テイシンタイって挺身隊じゃないの？ ほら、よく鞆子叔母さんが言うてたでしょ。
 朋子 ……。
 美世子 憶えてるでしょ？ あんたいつときあの人と仲よかったじゃない。
 朋子 鞆子叔母さん…？
 美世子 ちょっと、まさかそれまで忘れたわけじゃないでしょう？ あんたとおんなじ名前の叔母さんがいたじゃないの。
 朋子 ……そうだ…テイシンタイ…叔母さんがよく話してくれた…女子挺身隊…広島…
 美世子 そう、その鞆子叔母さんよ。あんたの父方の叔母さんだから、まああたしらとはあんまり縁がなかったけど…あの人、有名だったからね…
 朋子 近永…鞆子…
 美世子 あなた、凄く可愛がられてたでしょ？ いっしょにこの旅館に泊まりに来たこともあったじゃない？

朋子 叔母さんは…まだ若かった…ずっと昔…そうだ、「ここ」…この部屋に…いつしょに泊まったんだ…。それが最後だった…

美世子 そうよ、そのあと彼女はあの事件を起こしてあたしたちの前から姿を消した…。朋子 事件…？

美世子 憶えてるでしょう？ 当時、あまりにも衝撃的な事件だったために世間には知らされなかつたけど、あたしたち親族は全員厳しい取り調べを受けた。あなたも、あなたの父親も母親もみんな。

朋子 ……そうだ…でも…

美世子 でも彼女は罪に問われなかった、裁判もなかった、彼女のやったことがあまりに重大なことだったから。

朋子 ちがう…

美世子 彼女は病院に入れられた。そして忘れられていった。

朋子 ちがう…

美世子 なにをしたの？ 憶えているでしょう？ 彼女はなにをしたの？ 思い出して。

朋子 違う！

あたりは暗くなっている。波音は奇妙に歪んでいる。

美世子 違わないわ。あなたは彼女がなにをしたか知ってる。彼女がそのためにどこにいるのかも。さあ思い出して。

朋子 あたしは…

美世子 さあ。

朋子 あなたは…誰…！

看守たちが現れる。

看守 A 急ぎすぎだな。

美世子（看守 B） 申し訳ありません。

看守 A まあいい。薬の量も足りなかつたようだ。

看守 C 増やしますか。

看守 A そうだな。

朋子 近寄らないで！

朋子、看守たちから離れて仁王立ちに立つ。

朋子 あたしは狂ってなんかいない…！

看守 A 自分がなにをしたのか憶えていないのは狂ってる証拠じゃないのかな。そうだろう、近永頼子さん。

朋子 近永…とも…

看守 A あんたには姪なんかいない、あんたが近永頼子本人なんだよ。

朋子 ……

看守 A 忘れていたんだろ？ 自分が誰かも…なにをしたのかも…

朋子 違う、違う！ 憶えているわ！

看守 A 無理しないほうがいい。そのほうがわれわれにも都合がいいんだよ。君が狂人であるほうがね、それだけ君のやったことは異常なことだったんだ。

朋子 いいえ、私は憶えている。自分がやったことも、なぜそれをしなければならなかったのかも。

看守A それなら言ってみたまえ。なにをした…君はなにをした？
朋子 あたしは…

突如、照明が不安定になる。

音楽は途切れたり、別の曲がかかったりした末、ぷつぷつと音楽が止む。
舞台奥のほうから争うような騒音が聞こえる。

女の子の声 ちょっとなにすんのよ！

舞台上がぱつと明るくなる。

竹内捜査官 はいそこままで！

客席の方からきちんとした身なりの女性がゆっくり舞台に向かって歩いてくる。

美世子（舞台上で） 竹内…

看守A またあいつか…

竹内 全員その場から動かないように…！根岸くん！

袖幕をまくり上げて若い男が顔を出す。

根岸捜査官 はい！

竹内 そっちどつ。

根岸 確保しました！

竹内 調光卓に触らせないようにしてね。こないだ暗転がまされてオペレータに逃げられたでしょ。

根岸 はい！

根岸、顔を引っ込める。
竹内、舞台前に立つ。

竹内 どつも。

朋子 …。

竹内 いいところで申し訳ないわね。

美世子 どうせなら最後まで見てったら。

竹内 あいにくこのあとも二三箇所まわらなきゃならないんで。

根岸、登場。

若い女をひっぱってくる。

根岸 楽屋、オペ室ともに全員身柄確保しました。

若い女 ちょっと離してったら！

根岸 いや、仕事だからね…。

若い女 なんでよ！ おかしいじゃないの！ なんてダメなのよ！

根岸 いや、僕に言われてもね…。

朋子 シーちゃん、いいのよ。

朋子が声をかけると、若い女はおとなしくなる。

竹内、志津子をちらりと見て続ける。礼状を取り出す。

竹内 さて、お楽しみのところ申し訳ありませんが、みなさんの行為は集合遊興行為の禁止に関する法律第三条第二項、通称演劇禁止令に違反しています。これが令状です、主催者は誰ですか。

黙って朋子が挙手する。

竹内 主宰者および関係者は全員事情聴取のため同行願います。興行は即時中止してください。

朋子 とつくに中止してるでしょ、あんたが舞台に乗った時点でね。

竹内 けっこう。それから客席のみなさん、この法律で禁止されているのは演劇の上演行為であり、鑑賞行為は該当しませんので、みなさんはすぐにお帰りいただけます。ただ、お帰りのさい、住所氏名、それから指紋を採らせていただきますのでご協力お願いします。

美世子 ついでにアンケート書いてもらってよ。

竹内 そのジョークは三回目ね、町田さん。

美世子 (そっぽをむきつつ) あたしの十八番^{オハコ}なのよ。

竹内 (再び客席に) 指紋は強制ではありません。任意です。ですが客席の皆さんの中に、演劇禁止令の常習的な違反者が高い確率でおられることは統計が証明しています。身の潔白を証立てるためにも、ご協力の段、お願いいたします。…根岸くん。

根岸 はい。それじゃ劇団員の皆さん、こちらへどうぞ！

根岸、劇団員たちを誘導する。

志津江が再びつかかる。

志津江 おかしいじゃないこんなの！ なんにも悪いことしてないじゃないか！

根岸 いや、あのね…法律があるんだからしかたないんだよ。

志津江 ぜったいおかしいよ！

根岸 おかしいって言われても、決まりだから…。ホラ君も、大人しく、ね…

志津江 離してよ！ 触らないで！

根岸 あのね、あんまり反抗すると公務執行妨害になるよ。

志津江 なによこのハゲ！

根岸 ハ、ハゲ…？

竹内 (朋子に) 元氣いいわね。新人？

朋子 ええ、そんなとこ…。シーちゃんてば、落ち着いて。こうなったらもうしょうがないのよ。公演の場所と時間を嗅ぎつけられた時点であたしたちの負け。

志津江 だって！

根岸 ……ハゲ……？

朋子 あんた踏み込まれるのはじめてだったよね。慣れなきゃだめ。この人たちはね、ただの番犬なの。法律があるからそれを守るだけ。想像力の欠片もない…。怒るだけ損よ。ほら、いいからこつち来て。

駆け寄る志津江を慰めるように美世子が抱く。

美世子 だいじょぶだいじょぶ。あんた初犯だからすぐ帰されるわよ。…あたしら一晩お泊まりだけどね。

志津江 お泊まりって…牢屋に入れられちゃうの？

美世子 慣れっこよ、もつ。ちゃんとお泊まりセットも持ってきてるし。

竹内 さあもついいかな。根岸くん一足先に戻ってて。あたし本田くんの班と合流して中野から杉並まわるから。あっち、全然手が足りてないのよ。

根岸 はい…

竹内 なにブルーになってんの。さっさと行く。

根岸 はい…

美世子その他の劇団員たち次々に退場し、志津江も最後に根岸に付き添われて退場。それを見送る竹内を、最後に朋子が振り返る。

朋子 … 竹内さん。でもね、ひとつだけおぼえといて。

竹内 …

朋子 あたし、この芝居だけは必ず最後まで演るわよ。

竹内 …

朋子 どれだけ邪魔されようと、最後までね。

竹内は表情を変えない。

しばしお互いの目を見るふたり。

朋子、退場。

竹内、別退場。

暗転。

ACT.2 獄中劇

寝静まった夜半、暗がりの中、
牢屋に劇団員たちが入れられている。

美世子(景子) 眠れないの？

朋子 ん？ ん。

景子 シーちゃんのこと考えてるね。

朋子 (黙ってニヤリ)

景子 だいじょうぶよ。今頃うちに帰ってるって。

朋子 そうね。帰されておとなく帰ってればね。

景子 どういうこと？。

朋子 あの子、性格がさ…。

景子 性格がなによ。

広瀬(看守A役の劇団員) (後から茶々入れる) 若い頃の座長そっくりだもんなあ。

朋子 うるさいわね。あんた起きてんの？ また狸寝入り？

景子 そうかなあ、似てるか？

広瀬 似てる。

朋子 似てるかどうかしんないけど…、あの子もしかして今頃、あたしら助け出そうとして窓の下で扉に縄梯子かけてるかも。

景子 え…(一瞬絶句)…あり得る…。

朋子 あの子ってそういう突つ走るようなところあるのよ。凄い勢いで芝居やりたいて言つて初めて来たときからそう思ってたのよ。だからあたし最初とめたの。今芝居なんか根比べの世界なんだから、向かないんじゃないかって。

景子 まあねえ。

広瀬 似てる？ この人、前の座長が初めてつかまったとき、やったんだぜ、それ。

景子 なにを？…縄梯子？ 嘘！

広瀬 ホント。忍び込んで見つかって逃げ回った末に思いっきりとつかまって公務執行妨害…。

朋子 うるさいわね…あんた見てたわけじゃないでしょ。

広瀬 伝説ですよ伝説。

景子 あんたルパン三世か。

広瀬 だから今劇団内で栄光の前科持ちはこの方だけ。

朋子 あんたもう寝なさいよ、うるさいわね。男のくせにペラペラと…。

広瀬 あ、性差別発言(睨まれる)へいへい…(寝返りを打つ)

景子 考えてみればおかしな法律よね。芝居やって何回捕まっても微罪にしかならない。書類送検もなし。せいぜい一晩泊められて終わり。お巡りに逆らって公務執行妨害になるほうがメインの罪より重いなんて…ときどき、こんな法律いつたいなんのために作ったんだろって思っわ。

朋子 …そうね…なんのために…。

舞台上、監獄と別の場所。
夜の取調室。根岸が大量の書類を相手にひとり書類仕事をしている。

志津江 …。

黙って竹内の顔を見ている。竹内見返して、やがて目をそらす。

竹内 …あれほど言ったのに…。

志津江 あたしやめないから…ぜったいやめないからね。

竹内 姉さんは…お母さんはこのこと知ってるの？

志津江 （黙って首を横に振る）…。

竹内 あたしから知らせるわよ。

志津江 勝手にすれば。

竹内 志津江ちゃん。

志津江 結局自分が困るからでしょ、取り締まりやってる警察官が身内に芝居やってる人間がいるのが都合悪いからでしょ。

竹内 …ええ、そうね。都合は悪いわ。でもそんなこと言ってるんじゃないの。

志津江 じゃあなによ。あたしのこと心配してるっていうの？ 笑わせないでよ。

竹内 志津江ちゃん、あなたのやってることは法律に違反してるのよ。

志津江 そんな法律があること自体おかしいじゃない。叔母さんはなんとも思わないの？

竹内 あたしたちは法律を守るのが仕事なの。法律の善し悪しを考えるのは警察の仕事じゃないのよ。

志津江 そんなのおかしい！

竹内 でもね、あたしたちはロボットでもないし、想像力がないわけでもない、ただの人間よ。家庭を持って、仕事をして、普通に暮らしてる人間。誰かが法律を作って、その法律を守らせる仕事を誰かがやらなかったら、普通の人たちの普通の暮らしはすぐに崩れていってしまふ。あたしたちは番人かもしれないけど、法律を守っているんじゃないよ、人間を守ってるの。法律は道具でしかないの。

志津江 …わからないよ！…そんなの…

竹内 きれいな事に聞こえるかな？ その通り、きれいな事よ。でもね志津江ちゃん、たとえ建前だけの作り事でも、だれかが掃除しなきゃすぐ薄汚れてしまふ、そうしたら人間はそのきれいな事にすぎることでもできなくなってしまうの。

志津江 …わからない、納得できない、全然納得できない…！

竹内 いいわ…あなたに今納得してもらおうとは思ってない。…あなたはどうしたいの？

志津江 朋子さんたちを牢屋から出して。

竹内 …（無言で何度か頷いて）心配ないわよ。明日の朝までの辛抱。あの連中はこういうことに慣れてるしね。

志津江 どうせ言っても無駄だと思っけど…もう公演の邪魔をしないで。

竹内 あなたが劇団をやめてくれるなら考えてもいいわ。

志津江 …。

竹内 取引ってわけ。

志津江 ……卑怯よ…そんなの…

竹内 降ってきたわね。

外では雨が降り出し、遠く雷鳴が聞こえている。

竹内 車呼んであるわ。あなたはもう帰りなさい。

志津江 …。

竹内 (去るうとする志津江に) あなたのお母さんには、しばらく黙っておくわ。だからあなたも取引のこと、考えておいて。

志津江 …。

志津江、退場。

竹内、ひとり暗い窓の外を眺めている。
牢内では、寝静まった劇団員たちの中で朋子だけが、膝を抱え、鉄格子越しの夜を同じように見つめている。

暗くなり、明るくなる。朝である。

根岸、眠い目を擦りながら登場。

根岸 (書類を見ながら) えー、劇団「」の皆さん、おはようございます。秋山真弘さん、広瀬文さん、町田景子さん、それに佐伯朋子さん。全員微罪につき、釈放です。

のろのろと起きあがる劇団員たち。

根岸 充分反省し、以後このようなことのないように。んじゃあ、ヨロシク。(敬礼)

敬礼する根岸に手を振る町田。

根岸退場。

朝の光のなかに歩み出す劇団員たち。

ひとり、ふたりと言葉を交わしては別れていき、朋子と景子が残る。

景子 やれやれ…と。あんたどつすんの？

朋子 ん？

景子 あたし今日夜勤なのよ。帰ってもうひと寝入りするわ。

朋子 うん。

景子 シーちゃん来てないね。

朋子 うん。

景子 連絡してみる？

朋子 (首を振って) 過保護なマネはしない。これで懲りてくれたらその方があの子のためかもしれないし…

景子 これであきらめるような子じゃないと思っけどねえ。よけい燃えさかってんじや

ないの？

朋子 まあね…。

景子 …あんた、だいじょぶ？

朋子 なにが？

景子 昨日、寝てないでしょ。

朋子 …。

景子 なに考えてんのよ。

朋子 別に…

景子 ごまかさないの。何年あんたどつきあっていると思っただの。なんか考えてんでしょ。

朋子 …夕べあんたが言ったこと…

景子 あたし？ あたしなに言った？

朋子 ううん、なんでもない。あんた、明日は？

景子 休み。

朋子 じゃあ「おさない小山内」で。打ち合わせしよ。とにかく次の小屋みつけないと。

景子 頭痛いわあ。もう非法法でやらせてくれる小屋なんてそうそうないからねえ…。

朋子 ムンさんに相談してみよう。

景子 オッケー。んじゃ。

朋子 ん。

景子、退場。

朋子、もう一度あたりを見回し、退場。

ACT:3 「小山内」

仄暗い倉庫のような場所。
劇団員秋山、風呂敷包みを抱えて登場。
そわそわと落ち着かない様子。

その背後へ怪しげな男登場。

秋山 (気づいて)うわあっ。

男 …。

秋山 …あ、どうも…

男 …。

秋山 …あの、早速なんです…

男、秋山を手で制する。

男 …ドと言ったら。

秋山 緞帳。
どんちやう

男 シと言ったら。

秋山 シティロード。

男 三と言ったら。

秋山 三人姉妹。

男 いいだろう。で、ブツは？

秋山 これなんですけど…

秋山、荷物を男に渡す。
男、中身を開いて覗き、一部を取り出して見る。

男 ドーランか。…使いかけだな。

秋山 はあ。

男 24Pばつかりだな。
ニヨンビト

秋山 好きなんです、なんか。…あ、それはまだ開けてないやつです。

男 白か。なんで白ばつかりこんなにあるんだ。

秋山 いや…ちよつとそついつ役だったんで…。

男 ペンシル…スポンジ…このポンズは？

秋山 それも使いかけです。

男 それに大量の蓄光テープ。

秋山 あちこちの仕込みバラシでパクって来たんで…。

男 …。

秋山 どうすかね？

男、黙って指を二本出す(三〇〇〇の意)。

秋山 え…。いやあ…。

秋山、思いきって五本(五〇〇〇)出す。

男 …。

男、もう一度荷物の中身を見、考えてから、やはり指を二本出す。

秋山 え。それはいくらなんでも…。せめて、

秋山、四本五本を出す(四五〇〇)。
男、二本五本(三五〇〇)を返す。

秋山 カンベンしてくださいよ、マスター…(男が睨む)いや、あの…ゲレルさん。

男 (指を振りつつ)今俺は「小山内」のマスターじゃない。謎の演劇密売モンゴル人ムングン・ゲレル。商売に私情は禁物。君もいつもの常連客じゃない。そうだろう、秋山くん。

秋山 でもせめて、これ。

秋山、四〇〇〇。

男(ゲレル) …秋山くん、これ売っぱらってどうするつもり？

秋山 …。

ゲレル やめるの？ 芝居。

秋山 …。

ゲレル そのこと、朋子くんや景子ちゃんは知ってるのかな？

秋山 …。

ゲレル、再度三五〇〇。

秋山 あんた汚いぞ。

ゲレル 口止め料もコミだつてことだよ。このご時世、君も芝居人なら口の堅さがどれだけ重要か知ってるだろ。

秋山 くそ…足下みやがって…せめて

秋山、しぶとく三八〇〇。
ゲレル、譲らず三六〇〇。
息詰まる攻防である。

そこへ劇団員、坂本彩登場。

彩 あれ、マスター早いですね。

ゲレル あ、いや、

彩 あれえ、秋山さん、なにやってんの？

秋山 え、いや、

彩 なにこれ。

彩、秋山の荷物を覗き込む。

秋山 あっ、ちよっと、

彩 あー、ドーランだあ。

秋山 いや、あのね…

彩 ふーん、秋山さんやめるんだ、やっぱり。

秋山 えっ、やっぱりってどういふこと。

彩 そんな気がしてたんだ、あたし。ちえー、そしたらドローラン譲ってもらおうと思ってたのに。残念。

秋山 …。

彩 さっ、店開けますよ、マスター。

秋山・ゲレル …。

彩、エプロンをつけてさっさと開店の準備に入る。

秋山・ゲレル、顔を見合わせて、同時に四本、を出す。

ゲレル、財布を出して金を払おうとする。

彩 (舞台の外から) マスター、有線切り替えますよ。

ゲレル あ、うん。…じゃ、これね。(秋山に金を渡す)

今まで流れていた怪しげな取引っぽい音楽が、陽気な洋楽に切り替わる。
そこへ景子と広瀬登場。

広瀬 ういーす。

景子 おはよーす。おっ、秋山。

秋山 ういっ。

広瀬 なにやってんだ、おまえ。

秋山 え、いやあ、なにしていうか…

景子 あ、とつとつやめるんだ。

広瀬 なにい！

秋山 え、なんで知って…

広瀬 ちよつと待てオマエ、やめるってまさか芝居やめんじゃねえだろうな！

景子 なんてって、みんな知ってんじゃない？

広瀬 俺あ聞いてねえぞそんな話、コノヤロてめえ…！

秋山 え、みんなって…あいてて

広瀬 今やつてる芝居最後までやってねえだろうが、この裏切り者！

彩 マスター、看板灯つけて…あれ景子さん。

景子 おはよ。昨日はお疲れ。

彩 お疲れ様でした。

広瀬 テンメエ工どの面下げて座長にやめるって言ったんだ、ええッ！

秋山 いやまだ座長にはなにも言っていない…

彩 広瀬さんもお疲れ様でした。

広瀬 おーそりゃあ言えっこねえよなあ！ あんだけ辛抱強くお疲れ！ オマエのこと使ってくれた恩を仇で返す気かこのミドリムシ！

秋山 いてて、ちよつと待って…離せつてば、

広瀬 そんなこと座長が聞いたらどんなにがっかりするか…

景子 がっかりもなにも、あんたがやめるかもしれないって言い出したの朋子よ。

秋山・広瀬 えっ。

マスターと綾は椅子を出したりして開店の準備をしている。
そこへ朋子登場。

彩 あ、おはようございませーす。

朋子 おはよ、昨日はお疲れ。

景子 おはよ。
 朋子 マスター。
 ゲレル おう。

朋子 (景子に) 島村は？

景子 学校。今日試験なんだって。

広瀬 座長、あんた知ってたんか！

朋子 なに興奮してんのあんた…。

広瀬 秋山が、秋山がね！

秋山 …。

朋子 そつか…。決心ついたんだ。

秋山 はあ。

朋子 しょうがないよ。

秋山 すんませんでした。座長、気がついてたんですね…。

朋子 まあ、あたしは事情知ってるから…なんとなくね。

景子 故郷帰っても元気でねえ。讃岐だっけ？

秋山 丸亀です。

景子 いいなあ、空気良さそうで。あたしも遊びにいこっかなあ。

朋子 あんたは鰻鮓が目当てでしょ。

広瀬 こら！ なに勝手に和んでんだ！ 俺は納得しねえぞバカヤロー！

景子 なにひとり興奮してんのよ。

広瀬 うるせーうるせー、秋山！ おめーな、俺とオマエだけはながあっても最後まで舞台立ってようぜって…渋谷道玄坂から青山通りまで夜通し自動販売機のおつりの取り忘れを探し歩きながら誓ったことを忘れたとは言わさんぞー！

景子 なんだその作ったようなセリフは。

秋山 夜明け間近のNTT青山支店前で、一本のマウンテンデューをわけあったことを忘れたかッ！

朋子 まあしょうがないよ。秋山、あんたさ、帰ったら今までのぶん奥さん大切にしなさいよ。

秋山 …。

広瀬 なにッ？

景子 あと息子もね。

広瀬 …えッ！

朋子 今度中学なんですよ。

広瀬 ちゅッ…？

景子 あんたがしっかりしないとね。

秋山 あの…座長。ほんとに…お世話になりました！

朋子 …うん。

彩 秋山さん元気でね！

秋山、深々と頭を下げ、退場。

景子 …さて、と、彩ちゃん、あたしアイスコーヒー。
 彩 はい。

朋子 あたしも。

彩 はい。

広瀬 …マウンテンデュー。

彩 ないです。

景子 アイスコーヒーみっつ。

彩 マスター、アイスコーヒーみっつです。

ゲレル はいよー。

広瀬 畜生あのウスラバカ…

朋子 しょうがないでしょ、人にはそれぞれ事情ってもんがあんのよ。

広瀬 あのバカ俺には一言の相談もなしに…

景子 で、どうすんの？

広瀬 そうだよ、どうすんだよ！

朋子 なにがよ。

広瀬 なにがってバカがひとりやめちやっただよ！

景子 そうそう。うるさいけどそう。なんか策はあるんでしょう？

朋子 あんたまでなによ。策もなにも、やめるっていつてるもん、あたしが止めるわけ

にいかないでしょうに。ましてや田舎で女房子供が…

景子 そんなこと言ってるんじゃないよ。…あんたまさかわかってないんじゃないでしょ

うね。

朋子 なにが。

景子 …。

広瀬 だめだこれ、わかってない。わかってないよ！

景子 あのね座長さん、男ひとり足りなくなるでしょ。

朋子 …あつ！

景子 今やってる芝居、秋山の役、消すわけにいかないでしょ。

朋子 …。

広瀬 俺も島村もあいつとカラミあるんだぜ。二役ってわけにもいかねえしな。

朋子 (席を蹴る)…秋山あつ！ ちよつと待った！

景子 いまさら遅いつつーの！ (止める)

広瀬 アホがあつ！ なにも考えてなかったのかアンタ！

朋子 どーすんのよ！ ええ！ 広瀬ツ！ どーすんだ！

広瀬 だからどーすんだって俺が聞いてんのッ！

朋子 まずい…確かにあの役はまずい…。

景子 いまさら男の役者ひとり調達すんのは、このご時世…

広瀬 無理だよなあ。一昔前ならインターネットでちよつと甘いこと書けば役者なんて

ワンサと湧いてきたんだけど…

景子 今そんなことしてごらんさい、メールなんか全部読まれてあつというまに公演

嗅ぎつけられちゃうわよ。盗聴法があるんだから。

広瀬 いやな世の中だねえ。

景子 あんたいないの、身近に警察に目エつけられてもいいから舞台立ちたいって

奇特な男。

朋子 …。(考え込む)

ゲレル、登場。
考え込む一同の前に不敵な笑いを浮かべて立つ。

朋子 …。いない。

景子 いないわよねえ。

ゲレル …。

広瀬 あ、マスター、マウンテンデューまだ？

景子 あんたアイスコーヒーでしょ。

ゲレル …。(黙って去ろうとする)

景子 あ、マスター！ そうだあたし、小屋の話してくる。役者の件、相談しといて。
(席を立ててゲレルのそばへ)…ねえ、マスター、ちょっと相談があるんだけど…

景子とゲレル、相談するべく退場。

広瀬 やれやれ、どうすんだよ、まったく…。

朋子 台本を変えよう。

広瀬 え、でもさ…

朋子 それしかないんだからそうする。

広瀬 だってあの台本は…

そこへ根岸登場。

根岸 あのう…。

広瀬 おつ。昨日のおま公(おまわりのこと)！

根岸 やあ、昨日はどうも。

広瀬 なにしにきたんだ、あんた。

根岸 いやあ、暑いので、ちょっと休んでいこうかと…

彩 いらっしやいま…あ。

根岸 やあ。

彩 昨日のおま公。なにしにきたの。

根岸 いや、冷たいモノでも飲もうかと…。「ここ喫茶店でしょ？」

彩、朋子を見る。

朋子、シュラッグして、「いいんじゃないの」という態^{てい}。

彩 ご注文は。

根岸 マウンテンデューひとつ。

彩 ないです。

根岸 じゃあ、アイスコーヒー。

彩、引込む。

根岸 いやあ、暑いなあ…。

朋子 ねえ、あんた、根岸さんって言ったかしら。

根岸 あ、おぼえてもらえました？ どうもどうも。えーと、座長の佐伯朋子さん。

朋子 つきあい長くなりそうだもんね。たいへんでしょ、竹内の下じや。

根岸 いや、まあ、それなりにね。

朋子 今日はなに？ 次の公演のことでも探りにきたわけ？

根岸 いやいや、違う…

広瀬 嘘つけこのオマ公が。スパイに来たんだろうが。

根岸 いやいや。

広瀬 おまえらがあつちこつちにスパイもぐりこませてんのはなあ、こつちも先刻ご承知なんだよ！

根岸 いや、そうかもしれないけど今日は違う…

広瀬 あ、やつぱさうなの？ 語るに落ちたなオマ公！

朋子 今日は違うって、なにが違うの。非番てわけ？

根岸 いや、非番じゃないんだけど、その…四係の仕事できたんじゃないんだ…実は、他の部署から頼まれてね。別件なんだ。

朋子 四係は劇団摘発が専門でしょうに。他の事件なんか扱わないはずよ。

広瀬 別件って、じやなんの事件なんだよ。

根岸 それがその…失踪人探し。

広瀬 失踪人？ なんだそりや、それが俺たちとなんの関係が…

朋子 根岸さん。

朋子、立ち上がる。顔色がやや変わっている。

根岸 …ああ、そつなんだ。山下志津江さん…君たち、シーちゃんて呼んでたよね。あの子の親から捜索願いが出てるんだ。…君たちならなにか知ってるんじゃないかと思つてね。

景子とゲレル、登場。

景子 ねえ新しい小屋の件、うまく行きそうよ！

広瀬 んん！ (激しく咳払い)

景子 なによ…、あ。昨日のオマ公！

根岸 …それ、はやってんの？

朋子 広瀬。

広瀬 へいつ。

朋子 景子と一緒にシーちゃん探して。見つかったらまずあたしに連絡して。

広瀬 了解。

朋子 彩ちゃん、島村が顔出したら事情伝えて、連絡するよつに言つて。

彩 はい。

景子 なんの話よ。ちよつと朋子！

朋子、退場しかける。

根岸 あ、佐伯さん！

朋子 …。

根岸 もしなんかわかつたら、こつちにも連絡もらえないかな？

朋子 …。

根岸 これは四係の仕事とは関係ない、君たちの芝居のこととも関係ない話なんだ、頼むよ。

朋子 …考えとくわ。

根岸 ありがとう。

朋子、退場。

景子 ちよつと、朋子！ あんたはどこ行くのよ！

広瀬 秋山の件で、ホン変えるんだってよ。

景子 ホン変える？ だってあのホンは…

広瀬 そう。あのホンいじるとなれば、まず話通さなきゃなんない相手がいるだろ。行こうぜ。オレッチらは迷子捜し。

景子 迷子ってなによ…

広瀬 じゃあな、あばよ、オマ公！

広瀬、景子をひっぱって退場。

綾は、根岸が「オマ公」であることをゲレルに耳打ちしている。

ゲレル 彩ちゃん、有線切り替えて。

彩 え、でも…

ゲレル いいから。

彩 はい。

彩、引っ込んで有線切り替える。

しめやかに流れる「蛍の光」。

ゲレル、根岸の前に立つ。

ゲレル 喫茶「小山内」のマスター、ムンゲン・ゲレルです。当店の名前は日本最初の

新劇劇団築地小劇場の創始者小山内薫先生かおるにちなんでつけられております。

根岸 はあ。

ゲレル 突然ですが、閉店のお時間となりました。

根岸 え、でも、アイスコーヒー…

ゲレル 申し訳ありませんが、アイスコーヒーは売り切れました。

根岸 …いや、だって…

ゲレル 閉店のお時間となりました。

とととと椅子等を片づけ始めている彩。

ゲレル ご来店ありがとうございました。

根岸 いや、あのね…あっ

彩、根岸の座っている椅子を無理矢理取り上げる。

ゲレル またのご来店心よりお待ち申し上げております。

ゲレル、彩、並んで根岸に頭を下げ、退場。

根岸 ……。

根岸、退場。

ACT.4 晶子

とある場所。
椅子が二脚。そのひとつに主婦風の女が一人座って本を読んでいる。
そこへ朋子登場。

朋子 あ、すみません。

女は返事をしない。よく見ると女はウォークマンをして音楽を聴いているのである。
朋子はやや躊躇うが、女の視界に入るような位置に進み出、会釈する。

女 あら。

朋子 すみません。こちら進藤さんのお宅ですか？

女、ウォークマンのレシーバを外し、佐伯を見つめる。

朋子 あ、勝手に入ってしまっして申し訳ありません。

女 ううん、いいのよ。

朋子 進藤正之さんを訪ねてきたんですけど…

女 …。

朋子 昔ここに住んでいた人なんです。

女は黙って朋子を見つめている。

朋子 あ、進藤さんはもうこちらには…

女 あなた、佐伯朋子さんでしょ？

朋子 …そうですけど。

女 あら、当たった？ やっぱりネ。

朋子 …失礼ですけど、あなたは…？

女 ねえ、座らない？

朋子 …。

女 そこへ。

女は自分と向かい合わせに置いてある椅子を指さす。
朋子、そこに座る。

朋子 進藤さんをご存じなんですか？

女 ええ、そうね、よく知ってます。

朋子 もうこちらにはお住まいじゃないんでしょうか。

女 そうねえ、少なくとも今はここにはあたししかないわね。

朋子 あの失礼ですけどあなたは…

女 進藤にどんなご用件かしら？

朋子 …私は、以前進藤さんが作った団体に所属している者です。進藤さんに許可をい
ただきたいことがあるんです。

女 どんなこと？

朋子 それは進藤さんにしか話せません。あ、なぜ私のことを…

女 団体ねえ。それってつまり劇団でことでしょ？

朋子 …。

女 そんなに警戒しないでいいのよお。ねえ、もっとぶっちゃけて話しましょ。あなた座長さんなんですよ？

朋子 ……あなたは誰なんですか？

女 あたし？ 晶子っていいいます。近永晶子。

朋子 ……近永……。

*

別の場所。

志津江捜索組の景子と広瀬。

広瀬は携帯電話を持っている。

景子 ……じゃ朋子は前の座長のところに行っちゃったってわけ？

広瀬 そ。あの台本は先代の座長から引き継いだもんだからな。

景子 それにしたってわざわざ断んなくなっちゃっていいんじゃないの？ 今は朋子の劇団なんだから。

広瀬 まあそつだけど、あのホンはちよつといわくつきのホンだからな。…あ、もしもし、俺だ、広瀬だ、ああ、あんな、オマエうちの新人の山下つての知ってる？…うん、そう、女。もしなんか連絡あったら教えてくんねえか、うん、頼むわ。どうだそつちは？ あ？ またやられた？ 楽日のマチネ潰された？ バカヤロ、こつちは初日一発目で撃沈だぞ。おう。まあ、じゃ頼むわ。おう。(切る) なるよ、イワクツキとは。

景子 聞いたことないか？ 前の座長は、あのホンに特別な思い入れがあったらしい。満を持しての初演だったらしいよ。ところが…

広瀬 ああ、それなら知ってる。演劇禁止令で公演中止になった最初の…

景子 そう。初演がつぶされて以来あの芝居はとつと最後までできなかった。前の座長が絶望して引退するまで、ただの一度もな。

景子 引退の時、けつこつすったもんだあったって聞いたわよ。朋子と前の座長の間で… 広瀬 ふん。あとを自分に託して消えようとする座長に向かって、最後はかなりひどいことまで言ったらしい。まあ裏を返して言えばそれだけ信頼してたってことかもしれねえけどな。

景子 うん…。

広瀬 他の団員があきらめる中、佐伯朋子は最後まで座長を引き留めた。二人きりサシの直談判になって、ほとんど怒鳴り合いにちかいくるまでいった。夜が明け、二人ともものを言う気力もなくなつて、結局物別れに終わったその会談の最後に、前の座長が出した唯一の希望が、あのホンを最後までやり遂げてほしいってことだったんだそつだ。

景子 ……へえ…。

広瀬 お。もしもし。俺だ、広瀬だ。うん…

*

4係。

なにかの冊子を見ている竹内。

根岸登場。

根岸 戻りました。

竹内 どう？

根岸 すみません、志津江さんの足取りなんです、まだ…

竹内 そんなことは聞いてない。明日踏み込む現場の下見は済んでるの？

根岸 あ、それならだいじょうぶですけど…

竹内 ならよし。

根岸 でもあの…

竹内 なに。

根岸 さぞご心配でしょう。まさかあの子が竹内さんの姪だとはせんせん…

竹内 …（根岸を見る）

根岸 あ、すいません（口にチャック）でしたね。

竹内 心配ないわよ。たかが小娘の家出なんだから。

根岸 はあ…。あの…竹内さん、なにを見てらっしゃるんですか？

竹内 ん…あの連中の演ってた芝居の台本よ。

根岸 ああ。…実は僕もちょっと気になってたんですよ。

竹内 そう？

根岸 いやあ、なまじ最初のほう見ちゃったもんだから…。あの続きってびっぴなるんですかね？

竹内 （口元で笑つ）なかなか…面白いわよ。

竹内、根岸に台本を渡す。

根岸、台本を開いて読み始める。

*

とある場所。

女（晶子） そつ、近永。

朋子 ……どういことですか。

晶子 ねえ、あなたいくつ？

朋子 ……

晶子 あたしの母方のおばあちゃんがね、あたしが十八のときに死んじゃったんだけど、死ぬ前にあたしのことを呼んだのね。

朋子 ……

晶子 七十九歳のおばあちゃんの、若い頃の話。長い長い話だった。ずっと病院暮らしでね。自分の死期が近いのを感じたのかもしれないわねえ、あたしのこと病院に呼んでね、ベッドの枕元で…。そのときのこと思い出すと、今でもおばあちゃんの声と一緒に波の音が聞こえてくるような気がするわ。

朋子 波の音…？

晶子 千葉の勝浦にあったのよ、その病院。海沿いでね。今は普通の病院だけど、戦後すぐの頃は国が作った精神病院だったの。おばあちゃんのいた薄暗い個室の小さな窓には鉄格子を削り取った痕がうっすら残ってた…。

朋子 ……

晶子 そう、おばあちゃんの名前は近永頼子。あなたが演じているのはあたしの祖母なの。

*

捜索組。

広瀬 : おう、じゃ、とにかくなんかあったらこっちに知らせてくれや。うん。なに？

ドーラン？ おまえにドーランなんか借りてねえよ。…え、秋山に貸した？……
本人に言え。じゃな。

景子 ねえ、でその前の座長ってさあ、どこに住んでんの？

広瀬 さあ、知らん。あんたも含めて、前の座長を直接知ってる団員は佐伯をのぞいてもうひとりもいねえんだ。

景子 そうか…。朋子だけか。

広瀬 二番目に古い俺でさえ、俺が入った時にはもうあいつが座長だった。その当時はまだ前の座長を知ってる人間はいたんだけど、今じゃひとりも残ってない。

景子 あんまり話にもでないしね。

広瀬 でまあ、とにかくあのホンはしばらくはお蔵入りになってた。そりゃあいつにしてみりゃ複雑な部分もあったんだらうよ。

景子 でも…

広瀬 ああ、劇団引き継いで三年、とつとつやる気になった。気持ちの整理がついたってこともあるのかもしれない、何より今演つとかなないと、芝居つてもんがこの先いつ消滅するかわからねえからな。

景子 ……うん。

広瀬 やるからにはきつちりやりたいってのがあの人の性分だろ。台本いじるとなれば一言断つておきたいって思つたんじゃねえか？

景子 そうね。

広瀬 それにあのホンにはもともとちよつと謎な部分があるだろ。なんていうか、肝心なところがボカしてあるっていうか…。だからそこんところも意見を聞いてみたい、言い換えりゃそれくらい前の座長に対しての蟠わたかまりが融けたってことなんじゃねえか。

景子 よくしゃべるわねえ。

広瀬 ええ？

景子 手エ止まってるわよ。

広瀬、電話をかけ始める。

*

4係。

根岸が台本を読んでいる。

根岸 ふうん…。なんか頭こんがらがって来ますね。えーとつまりこの近永頼子っていうのが…なんかの事件を起こして、怪しげな精神病院みたいなところに入れられてるわけだ…。

竹内 そう。まあ自分探しの變形版でとこね。
自分探し？

竹内 自分は本当はなにをしたのか。自分は本当に狂っているのか、正気なのか。自分は本当は誰なのか…。

根岸 ああ、なるほど…、結局この近永鞆子っていう叔母さんと姪の朋子っていうのはどっちも存在してるわけですか？

竹内 そのへんが最初の謎になってるのよ。どっちかがどっちかの妄想なのか、両方もが現実なのか。

根岸 ともかく叔母さんの鞆子は終戦時十七歳で広島の挺身隊にいて…

竹内 終戦とともに上京、大学を出て公務員になり総理府職員になる。

根岸 宮内庁書陵部図書課を経て、東宮侍従女官職にいたる…と。つまり皇室まわりの仕事についたわけですね。

竹内 終戦から十年。二十八歳の彼女はそこで事件を起こした。

根岸 いったいどんな…

竹内 そりゃあ…読めばいいんじゃない？

根岸 …。

台本に目を落とし、頁を捲る。

それが描かれている箇所を発見する。

根岸 ああ…これが…。

竹内 終戦直後にね、似たような事件が実際にあったのよ。案外その事件をモデルにしてるのかもね。そのときも結局刑事事件にはならず、犯人は精神異常と断定された…。

根岸 …天皇暗殺未遂事件…。

*

とある場所。

晶子 彼女は最後の最後まで自分は正気だと思っていたわ。もちろんあたしもそう思ってた、まわりの人間はみんなそうだった。

朋子 …。

晶子 戦争に負けたとはいえ、当時はまだまだ天皇陛下下つていえば神様同然の存在だった。当局はどつしても彼女を狂つてることにしたかったのよ。彼女が事件を起こしたのは二十八歳、それ以来五十年間、彼女は病院に閉じこめられていた…。

朋子 …本当の話なんですわね…。

晶子 叔母と姪つてことになってるけど、そこは創作。本当は孫に語る祖母の話がもたなくなってるの。

朋子 あなたがああの本を…

晶子 お芝居の形にしたのは進藤よ。あたしは話をしただけ。でも…そうね、だいたいあたしの話し通りになってるわねえ。

朋子 だいたい？

晶子 ええ、だいたいね。

捜索隊。

景子 ねえ、あのホンで謎な部分でなによ。

広瀬 ええ？ 決まってるじゃねえか。最後のとこだよ。

景子 最後…ああ。

広瀬 なんてああなっちゃうのか、いまいち釈然としねえだろ。

景子 このさい作者に聞けば早い…か。

4係。

根岸 しかしよくまあこんな入り組んだ話考えますねえ。(表紙を見返す) 誰が書いたんです？ 進藤…正之。あれ、こんな名前の劇団員いましたっけ？

竹内 ああ、それ？ いないわよ。

根岸 いないって、劇団やめたってことですか？

竹内 (首を振る) そうじゃなくて実在しないのよ。調書にも書いてあったでしょ。佐伯朋子が座長になる前、劇団員たちが合作で作ったホンのよ。その合作のペンネームが進藤正之ってわけ。

とある場所では晶子が椅子から立ち上がる。

朋子 近永さん、私、あの台本でどうしてもわからないところがあるんです。

晶子がゆっくりと、朋子をかえりみる。

4係。

根岸 あれえ…なんでこうなっちゃうのかなあ…。

竹内 ああ、最後のとこね。

根岸 よくわかりませんね…。

竹内 そうね。

根岸 なんて朋子がこのなんだかよくわからない白塗りの男を…殺しちゃうんですか？

明かりが変化する。

4係と捜索隊は退場。

晶子 …近永鞆子はずっと憎んでいた。彼女にとって現実はその日見た広島の地獄絵図の延長にあるものでしかなかった。

どこかから「声」が聞こえ始める。

声 …頭から流れる血が、顔から肩へ、背中へ、胸から腹へ伝わって、どす黒い血痕をつけている者は数知れない。

晶子 両手をだらりと垂れて、人並みに押されるまま、よろめきながら歩いている者…彼女は答えを探したのよ。必死で。たったひとり。誰も気がつかなかった…。彼女がなにを求めているのか。彼女は自分の見たものの辻褄を合わせたかったのよ。自分の中に棲みついたあの光景を終わらせたかった…。

白塗りの男、登場。

白塗りの男 …鞆子。鞆子…。

朋子 ……もうやめて…

白塗り男 だいじょうぶかい、鞆子。

晶子 誰も気がつかなかった。彼女は考え続けたのよ。どうすればあの光景が…あの恐ろしい音楽が鳴りやむのか…

白塗り男 すまなかったよ鞆子。おまえのようなまだ無垢な少女に行かせるべきじゃなかった。でもしかたなかったんだ。

晶子 何度も何度も、この男の夢を見る。体中に冷たい汗をかいて飛び起きる。何度も。

白塗り男 おまえも女子挺身隊の一員である以上、しかたなかったんだよ。わかっておくれ、鞆子。

朋子 近寄らないで…お願い…

晶子 そして彼女は答えを見つけた。見つけたと思った。だから彼女はまっすぐに歩いた。その光景を終わらせることのできる者のいる場所まで。誰も気がつかなかった。

白塗り男 鞆子。さあ、帰ろう。うちに帰ろう。

朋子 いや…

白塗り男 どうしたんだ。なにを怖がっている？ もつなにも心配ない。お父さんと一緒に帰るんだよ。戦争はもう終わったんだ。おまえもラジオで聞いたろう？ 畏れ多くも天皇陛下のお声を。

晶子 その声だ。それがあの光景を作りだした男の声。あの忌まわしい音楽を奏でるところを許した男の声。鞆子はそのとき答えを見つけた。鞆子はその声のところへ歩いた。懐に小さな刃物だけを持って。誰も、最後の瞬間まで誰も気がつかなかった…

朋子 違う…

晶子 そしてあなたはその男に向かってある言葉をつぶやき、刃物を振り上げた。

朋子 違う…

晶子 あなたは取り押さえられ、すべてが終わった。そしてあなたは五十年のあいだ閉じこめられていた、狭く暗いところに。

朋子 違う…

晶子 そのときあなたがつぶやいた言葉、その男と鞆子以外に誰ひとり知るものはない、その言葉。あたしの祖母が勝浦の病室であたしにだけ囁いて教えてくれたその言葉…あなたは知っている。

朋子 天皇陛下万歳…

晶子 そうよ。

朋子 違う、違う、違う…

朋子、懐から小さな刃物を取り出し構える。白塗りの男に向けて。

朋子 そうじゃない。

白塗り男 鞆子。今日の夕飯はなににするかい？ おまえの好きなものをなんでも買ってこような。

朋子 近寄らないで！…違うの……そうじゃないの…

晶子 なにが違うのかしら。

朋子 もしも…鞆子が…自分の…

晶子 落ち着いて…ゆっくりしゃべって。

朋子 自分のなかの…地獄に…地獄を精算するために…あの事件を起こしたのなら…
晶子 …。

朋子 本当にそれだけのことなら…

白塗り男 鞆子。鞆子や。

朋子 あたしはこの男を殺す必要はなかった！

晶子 その男が誰だか知っている？

朋子 知っているわ。この男はあたしの…父よ。

晶子 …。

朋子 血は繋がっていないけど、あたしを育ててくれた父。小さな村で挺身隊長を務めていた父。地図にない島で生まれた親のない私を育ててくれた男…

朋子のナイフは白塗り男の胸元に触れんばかりの近さに翳^{かげ}されている。

晶子 何度も、

朋子 何度も出てくる…そのたびに全身に冷たい汗をかいて飛び起きる…なぜそれほどこわいのか…なぜ自分の育ての親がそれほど怖いのか…なぜ…殺すのか…わたしにはそれがわからない…

晶子 …。

朋子 なぜこの男を鞆子は殺し、そして唐突に物語は終わってしまったの？ そしてなぜ

晶子 …。最後のシーンが…あんな…

朋子 あなたなら知ってる！ この物語を作り出したあなたなら…

朋子、身を翻して晶子に刃物を向ける。

朋子 教えて…！

晶子 あなたが佐伯朋子だからよ。

朋子 …。

晶子 あなたは現実そっくりの夢を見ているだけ。

朋子 わからない…。

晶子 その男を殺しなさい。

晶子、朋子に背を向けて去っていく。

看守三人、登場。

白塗り男、退場。

看守A なぜだね？

朋子 …。

看守A なぜその男を殺す？

看守A 我々はそれが知りたい。君の父親はとくに亡くなっている。しかし君は夢のなかで何度も父親を殺す。なぜだ？

朋子 …。

看守A 我々はそれが知りたい。君の狂気の源にあるものが知りたいんだよ。

朋子 …。あたしが…佐伯朋子だから。

看守A …。

朋子 あたしが…現実そっくりの…夢をみているから…

看守たち顔を見合わせる。
朋子、その場に昏倒する。
駆け寄る看守たち。

看守B（景子） 朋子！

看守A（広瀬） ストップ。おい！

看守C（彩） 朋子さん！

広瀬 ちよつと水持ってこい。

彩 はい。（退場）

景子 朋子！ わかる？

朋子 …。

景子 びっくりした…。あんた稽古してて倒れたのよ。わかる？

朋子 稽古？

景子 そうよ。

広瀬 おどかすなよ…。おい、音止めていってば！

朋子 秋山は…

景子 なに言ってるんの、秋山退団^{やめ}て田舎帰ったでしょ。

朋子 ……。

景子 秋山抜きでラスト変えるって、あんたが言ったんでしょくに。

朋子 ラストシーン…そうね…変えないと…

虚空を見つめて考えに沈む朋子を心配げに見守るふたり。
暗転。

ACT.5 地図にない島

喫茶「小山内」。
椅子がひとつ。そこに根岸が座っている。
傍らにマスターが立っている。

根岸 ……いやあ…。

ゲレル ……。

根岸 今日はヒマなんですか、お店。

ゲレル ……

根岸 劇団の人誰もきませんね。

ゲレル ……。

根岸 このお店、けっこう長いんですか？

ゲレル ……。

根岸 あの…別に仕事で聞いているわけじゃないんですよ。この店、けっこう、なんか好きな雰囲気なんで、あの、なんか探りに来たとか張り込みとか、そんなじゃ全然ないですから、ホントに。

ゲレル ……。

根岸 もうホント、純粹に客として、憩いのひとときを過ごしたいなあ、なんて…

ゲレル ……。

根岸 あの…アイスコーヒー、まだですかね？

ゲレル ……。

根岸 こないだ飲み損ねちゃったから…今日こそ飲むぞ！ なーんて思って…

ゲレル ……。

彩、買い物袋を抱えて登場。

彩 戻りましたー。マスター、プチトマトなかったんで、普通のトマト…。

ゲレル (袋を受け取る) ああ、いいよいいよ。じゃ仕込みするから、店頼むね。

彩 はい。

ゲレル、退場しかけて、袋から缶コーヒーを取り出し、根岸に渡す。

ゲレル ん。アイスコーヒー。

根岸 ……えっ。

ゲレル、退場。

彩 ……。

根岸 やあ、こんちは。

彩 ……。

根岸 彩ちゃんだったよね。あの…他の人たちは今日は来ないの？

彩 ……。

根岸 あ、稽古かなんかしてるんだ？…あ、でも彩ちゃん、いるよね。

彩 ……。

根岸 座長さんとか、みんな元気？ シーちゃんて子、まだ見つからない？ 心配だよな。

彩 …。

根岸 あの、別に仕事で聞いているじゃないんだ。ホント。ホントにホント。

彩 仕事じゃなきゃどうしてそんなこと聞くんですか？

根岸 いや…なんていうか、妙に気になっちゃってさ。あの…四係に来て最初の仕事だったし、演劇やってる人なんて身の回りにいないしね。

彩 いなくしてるのはそっちじゃない。

根岸 そうなんだけど…。いやあ、演劇令の取り締まりやってるテカのくせにこんなこと言うとヘンかもしれないけど、なんか、いい感じだなあとか思っちゃってね。

彩 なにが？

根岸 その…演劇やってる人たち…。っていうか君たち、かな。 ……っていうか、君かな。

彩 …。

根岸 あ、いや、ヘンな意味じゃなくてね。いや、ホントに。いい意味で。いい意味っていうか、いろんな意味で。えーと、いや、だから今度、お茶でも飲まないですかね。

彩 …。(じっと根岸を見ているが、思わず笑ってしまう)

根岸 OK? OKだよ。じゃあさ、あ、あれ…?

突如流れる蛍の光。ゲレル登場。

ゲレル 閉店のお時間になりました。

根岸 え、あ、はい…。(席を立つ)

ゲレル 四百八十円になります。

根岸 えっ。だってこれ缶コーヒー…

ゲレル 四百八十円いただきます。

根岸、しかたなく五百円玉を渡す。

ゲレル・彩 ご利用ありがとうございました。

ふたり退場。

根岸 …。

根岸退場。

某私立大学の史学研究室。

グリグリメガネの助手(島村)がいる。

志津江登場。

島村 (気配を感じ) あー、先生なら今日はもう帰ったんで…なにが質問なら…

志津江 …。

島村 …あれ、えっと…

志津江 ごめんなさい、いきなりきちゃって。

島村 いやいや、いいんだよね、うん、まあ、そういうところもあるよ、えっと、汚いけど…座る…ところないね…

志津江 お仕事の邪魔しちゃいました？

島村 いやいやいや、全然全然。今日はね、比較的ヒマだからね。もう試験も終わって
採点も粗方済んだしね。

志津江 そうなんだ。

島村 まあほら、大学の研究助手なんか、雑用みたいなもんだからね。えっと…

志津江 でも島村さんも先生なんですよ？

島村 まあときどき…でも僕なんかコソコソひとり研究してるほうが気が楽だから。
えっと…

志津江 史学科って…歴史の研究ってこと？

島村 そうそう。歴史、僕は近世日本史…。あの、僕の名前知ってるんだ？

志津江 え…

島村 じゃあ史学科の学生？ でも…見たことないなあ…

志津江 え、え？ それって…冗談？

島村 え、ははは、そうそう冗談冗談。……冗談ってなに？

志津江 ……

島村 ……

志津江 うっそー！

志津江、いきなり笑い出す。

島村 ははは。え、え？

志津江 あたしですよ島村さん。山下です。

島村 うん。ん？

志津江 劇団の。

島村 (ビクツとしてあたりを見回す) え？ なんのこと？ 僕は演劇とかには縁がな
くって…いや、なにも法律で禁止されてるからじゃなくて、いまいち興味が持て
ないというか、え？ 山下？…ヤマシタ…

志津江 山下志津江。信じらんない、ホントに気づいてない…。

島村 あ、あああ、あ、シーちゃん！

志津江 ハイ。

島村 あ、いやあ、いやははは、なんだ。よく来たね。ようこそ。まあ汚いけど…座る
ところは…ないか。えーと、

志津江 島村さん、劇団にいるときと全然違う。

島村 あ、う、あの、シーちゃん…その…ここではその、そついつ単語は…壁に耳あり
だしね…

志津江 (声をひそめて) 島村さん、芝居やってること、職場で内緒なんですか？

島村 そうなんだよ…。大学ってところはさ、保守的なところだから、そついつの周りに
知られるとマズいんだ…。

志津江 へえー。

島村 で、なに、どうしたの？ 突然。あ、わかった。最近稽古に行かないから、広瀬
くんあたりが…

志津江 うっん、違います。だってあたしもあれから行ってないし…

島村 じゃあ…

志津江 うーん…なんとなくかな…。

島村 あ、そう…

志津江 …。

志津江は物珍しそうにあたりを見たりしている。

志津江 島村さんてどうして芝居始め…

島村 …！（その単語はヤメテ、という振り）

志津江 …どうして…あれ始めたんですか？

島村 いやあ…僕の場合…あのね…

島村、カーテン閉めたり、ドアのカギを確認したりして、すこし安心する。

島村 最初に見たのが今ちょうどやってる芝居でね…。

志津江 え、でも今の台本で、はじめてやるんじゃないや…

島村 そうなんだけど、それは朋子さんが座長になってからなんだ。その前の時期にはあのホン、けっこうやってたんだよ…もちろん最後までは見れなかったけどね。

志津江 そうなんだ…。

島村 それで、妙にそのことが気になっちゃって。思い切って台本だけ読ませてくださって頼みにいったの。劇団に、そしたら…

志津江 そしたら？

島村 そしたら劇団員になっちゃったの。

志津江 え、そのまま？

島村 そう。取り込まれちゃったのね。

志津江 へえー。

島村 だから、あのホンがなかったら、僕芝居やってないかもしれないなあ。…やってたかもしれないけど。

志津江 よかった。

島村 え、なにになに？

志津江 聞きたかったんです、ホントはそのこと。

島村 うんうん。え、なにを？

志津江 あの台本のことって、なんとなく聞きにくい雰囲気あるの、わかります？

島村 その……劇団のなかで、ってこと？

志津江 うん。だから、凄く気になってるんだけど、今まで聞けなくて。

島村 うんうんそうかー。そうかなあ？

志津江 絶対ありますよ、そういう雰囲気。

島村 そうだな、わかるよ。…わかるかな？（自問している）

志津江 わかんないんですよ。特に最後のところがどうしてもわかんなくて。

島村 最後？ ああ、台本のこと？

志津江 それで島村さんに聞いてみよつかなあと思って。

島村 うんうん。そうか。あのね、僕が思っにはね…。

島村、授業が始まったようにあたりをうろつろしながら話し始める。

島村 あの脚本の基本構造はさ、主人公の鞆子が、…あ、革へんに丙ひのえって書く方の鞆子ね、その鞆子の姪の朋子、月ふたつの朋子ね、ややこしいね、板書しようか。えっと黒板どっかに…

志津江 あの、わかります。

島村 あそう？ での流れのなかで、なぜ叔母の鞆子が精神病院のような場所に入れられているのか、彼女がなにをしたのか、そういう謎がだんだん解き明かされていくっていうのが基本のストーリーなわけだ。

志津江 それを姪の朋子が解明していくわけですよ。

島村 うん。近永鞆子が自らの原爆体験を精算するために天皇を暗殺しようとしたこと。そのために精神病ということにされて長い間幽閉されていること。ふたりのトモコが同一人物ならこの物語は…

志津江 自分探しですよ。

島村 うん。ところが、何回か出てくる悪夢のシーンに登場する白い顔の男。彼女にとってはこれが恐怖の象徴になっているわけだけど、最後のほうでこの男を鞆子が唐突に「お父さん」と呼ぶ場面が出てくる。

志津江 はい。

島村 なおかつ、その直後、鞆子は白い顔の男をいきなり刺し殺す。もちろん、悪夢のなかでだけ。

志津江 …。

島村 そして暗転を挟んで次のシーンはもうラストシーンだね。鞆子が散乱する無惨な死体の真ん中にひとり座っている。これは一見最初のシーンに戻ったように見える。でも鞆子の表情は最初と全く違って、穏やかで、まるですべてがリセットされたような透明なほほ笑みさえ浮かべている…。これはト書きの受け売りだけだね。

志津江 そつなんです。それがわからないの…。あれが鞆子のお父さんならどうして殺してしまったの？ どうしてあんな終わり方なの？ あのラストシーン、鞆子のいる場所はどこなのか？

島村 病院なのか、それとも、被爆した広島爆心地なのか…。それとももっと違うところなのか…。

志津江 違うどこかって…どこですか？

島村 …あのね、これは僕が勝手に想像していることなただけ…。

志津江 はい。

島村 朋子が白い顔の男を父親と認めるくだりで、気になるセリフがあるんだよ。

志津江 どのセリフですか？

島村 「地図にない島」。

志津江 ああ…そういえば…

島村 「地図にない島で生まれた親のない私を育ててくれた男」。鞆子はそう言っている顔の男を夢のなかで殺す。その言葉を説明するような箇所は他のどこを読んでも一行も出てこない。そしてそのあたりからなんだ、あの台本が妙にちくはくな感じになっていくのは。

志津江 地図にない島…。

島村 上京して宮内庁に入る前、近永鞆子は広島にいた。実はね志津江ちゃん、終戦当時の広島には、地図から消された島が実際にあったんだよ。

志津江 え、本当に…？ 今でも？

島村 そりゃ島は消えないから今でもあるさ。もちろんいままでは地図にもちゃんと載っている。周囲四キロメートル、瀬戸内海に浮かぶ小さくてのどかな島だ。

志津江 それがどうして…？

島村 その島にはね、日本陸軍の毒ガス工場があったんだ。

志津江 …。

島村 毒ガスは国際的に禁止された兵器だったから、この島の存在はひた隠しにされ、地図からも消されていた。正式名称は東京第二陸軍造兵廠忠海製造所ただのつみ。昭和四年広島県大久野島おおくのに作られ、昭和二十年に米軍によって破壊された。

志津江 大久野島…。

島村 敗戦時この島に残された毒性物質の量は三千トン。…これは全世界の人間を全部殺すことができる量だ。そしてそのうち約半分がイペリットだった。志津江ちゃんイペリット知ってる？

志津江 聞いたことない…かな？

島村 別名マスタードガス。皮膚から体内に入り込むと全身がただれ細胞を破壊し呼吸不全、視力障害を引き起こし二十四時間以内に死ぬ…。最悪の毒ガスだ。

志津江 なんか…怖いですね。

島村 怖いね。考えてみれば不思議なんだけどね、日本で初めて原爆が実戦使用されたあとも、核兵器はずっと作られ続けてきた。マスタードガスは第一次大戦でドイツが初めて使って、あまりの悲惨さにすぐ禁止されてしまった。どうしてかわかる？

志津江 うっん。

島村 あまりに非人道的だから。おかしい話だろう？ 核兵器は毒ガスに比べたら人道的ってわけだ。

志津江 よくわからない理屈ですね。

島村 うん。とにかく大久野島ではその非人道的兵器を作り続けていた。当時は知識も不足してるし、なにより戦時経済で生活が圧迫されてるから、怖いと知りつつ防毒設備の不十分な工場で働いて、中毒症状に苦しんだ人たちが大勢いたはずだ。人がたくさん死んだ。そういう意味でも大久野島は…死の島だったのかもしいね。

志津江 死の島…ですか。

島村 「地図にない島」っていうセリフが、もし大久野島のことを指しているとすれば…

志津江 「地図にない島で生まれた、親のない私…」。

島村 島に住んでいた住民たちは工場の設置とともに立ち退かされた。大久野島は全島をあげて毒ガスの島となった。だけどその工場で働く人たちは本土から通ってこなければならなかったし、当然島に住み込んで働いていた人たちもいたはずだ。もしも白い顔の男が、そういう人たちのひとりだったとしたら…

志津江 じゃあ近永鞆子は…

島村 さあ、そこから先は僕の勝手な想像。近永鞆子はそういう島に住み込んで工場で働く人たちの間で生まれた。そして彼女の親は、イペリットガス製造の過程で、毒に犯されて死んでしまったんじゃないだろうか。親のない彼女を引き取って育てたのが…

志津江 白い顔の男…じゃああのラストシーンは…

島村 僕らはあれを鞆子の心象風景、被爆のイメージと捉えているけど、じゃあどうしてそこで鞆子は穏やかなほほ笑みを浮かべているんだろう？

志津江 そこが彼女の、ふるさとだから…？

島村 勝手な想像だろ？

志津江 でも…もしそうだとしても、どうして父親を殺すのかわからない。

島村 うん、確かにそつだね。リセットしたかったのかな…。よくわかんないけどね。

志津江 …。

島村 どうかした？

志津江 うん、決めた。

島村 決めたんだ。そつ。うん。え、なにを？

志津江 あたし、もう少し劇団にいることにします。

島村 …。

志津江 ホントはやめようって思ってたの。さっきまで。でもやめるのやめた。もう少しあの台本のことかわかるまで。

島村 うん。

志津江 あたし台本のこと、朋子さんにも聞いてみる。

島村 そつ。うん。それがいいよ。

志津江 (戸口で振り返る) 島村さん、もうひとつだけいいですか？

島村 いいよいいよ。

志津江 あのホンを書いた進藤正之っていう人は…

島村 ああ、そのこと？ あのホンはね、昔の劇団員たちが合作で作ったホンなんだ。

だから進藤正之っていう劇団員はいないんだよ。だって、朋子さんが座長になる前、この劇団には男のメンバーはひとりもいなかったんだから。

志津江 …そうなんだ。

島村 それじゃ。

志津江、退場。

島村、退場。

ACT.6 変容

広瀬、登場。
景子、登場。

広瀬 どうだ。

景子、黙って首を振る。

広瀬 油断した…。

景子 そうね。

広瀬 どう思う。彼女はどこに行ったんだ？

景子、黙って首を振る。

広瀬 彼女にいちばん頻繁に接していたのは君だろ。見当つかないのか？

景子 …わからない。この頃ひどく現実から遠のいてしまって、なにを考えているのかわからなくなることが多かった。

広瀬 兆候はあったわけか。

景子 彼女が訪ねてきたときからよ。

広瀬 彼女？

景子 近永晶子。

広瀬 晶子…。

景子 朋子の遠い親戚だつて言つて会いに来たの。それからよ、朋子の様子が変わったのは。

広瀬 本当に親戚なのか？ 若い女だったんだろ？

景子 (肩を竦め) 確かめようがなかったのよ。とにかく朋子と晶子は長い間話をしてきた。

広瀬 いったいなにを話してたんだ。会話の内容は？

景子 立ち会ったのは彼よ。

島村、登場。

島村 それが、なんともとりとめのない話ばかりだったんだ。子供の頃の思い出話みたいな…トンボを追いかけたこと、野ウサギと戯れたこと、ヤマツツジの蜜を集めたこと…そんなことばかりだった。

景子 ふたりは同じ場所であつたこと？

島村 そこはなんとも…。お互い自分の思い出話の断片を代わる代わるに話していただけのよう。ただ…

広瀬 ただ？

島村 最後に朋子がこんな話をしたんだよ。自分は海のすぐ近くで育つた、船が出るときにはかならず港の近くの浜辺に行つて、船が遠ざかっていくのをいつまでも、隠れて見ていた…天気の良い日には向こう側、手に手が届きそうにはっきりと見えた…。

広瀬 向こう側？ 向こう側ってなんだ？

島村 さあ…。とにかくそう朋子が意ったとき、近永晶子と名乗る女は、それに答え
て、「こつ言った」。

そこに近永晶子が登場するかのように、三人の目がひとつの場所に向けられる。
そこへ志津江、登場。

志津江 あのー…おはようございませーす。
一同 ……。

志津江 ご心配かけてすいませんでした。

広瀬と景子、同時に手を叩く。

広瀬 ちよつとストップストップ。

景子 シーちゃん、あんた、なによ、どこ行ってたの！

志津江 ごめんなさい。…稽古中でした？

島村 そうだけど、だいじよぶだいじよぶ。…ああ、びっくりした。ホントに近永晶子
が出てきたのかと思った。

広瀬 出てくるわけねえだろ。だいたいひとり足りなくなってんのに人増やしてどうす
んだ…。

島村 まあ、とにかくよく帰ってきたね。お帰り。

景子 まったく、心配させないでよね。島村から話し聞いてたからいいようなもんだ
けど…。

広瀬 オマエ、やめようと思ってたんだってえ？

志津江 ……(島村目線)もつおしゃべりだなあ…。

広瀬 いや…みんな心配してたからね…。

景子 あんた、ウチに連絡してんの？ 搜索願出てるらしいじゃないの。

志津江 だいじよぶ、連絡だけはしてます。

景子 そんならいいけどさ。どこ寝泊まりしてんのよ。

志津江 友達のとこ。

広瀬 オトコだな。

島村 うん。

志津江 違いマス。女友達。

広瀬 女友達という名のオトコだな。

島村 うん。無理がある。

志津江 あの、そんなことより、人増えたってどういうことですか？

島村 新しいボン。秋山が田舎帰っちゃって、今座長が台本作りかえてるんだけど…

広瀬 無理あるよな！。だいたいこれ、キャラ変わってないか。

景子 まあねえ。

島村 近永晶子っていう女が登場してるんだ。朋子のところに訪ねてくる。そしてその
あと朋子は姿を消す…。

志津江、広瀬から変わった台本を受け取り、読む。

志津江 ……「晶子 あたしも子供の頃、よく浜辺から海を見ていたわ。天気の良い日に
は島がくつきり見えた」…。

島村 それがさっきのところの晶子のセリフだ。

志津江 「ひよっとしたら海を挟んであたしたち、ずっと昔から知り合いだったのかも
しれないわね…」(頁をめくる) 晶子、退場…。

広瀬 いっそシーちゃんそれやるか。晶子役。

島村 ああ、そうだね、それいいかも。もしかして座長もそう思って書いたのかも…

志津江 そんなことより、島村さん、これ…

島村 うん…

景子 なによ。

志津江 天気のいい日には島がくつきり見えた…大久野島は広島県竹島市忠海たのみから僅か
三キロ南。

島村 お、調べたね。

志津江 瀬戸内海をはさんで晶子のいるのが広島で、朋子のいるのが大久野島だとし
たら…

広瀬 なんだい、そのナントカ島…

志津江 島村さん、あの話、座長にしたんですか？

島村 してない。

志津江 じゃあ、じゃあ座長も自分である結論に達したってことじゃないですか！「名
前のない島」が大久野島だって…

広瀬 だからなんだよ、その島はよ。

志津江 それはあとで島村さんが板書つきで説明します。とにかく朋子はこの会話で自
分が大久野島の生まれであることを思い出したんです。

広瀬 そりやおかしいだろ？ 近永頼子は広島市近郊の小さな村に生まれたっていう設
定で話が進んできてんだから。

景子 そうね。だから原爆が落ちたとき挺身隊にかり出されて…

志津江 だから…思い出したんですよ、きつと、本当はそうじゃないってことを。

景子 思い出したって、朋子が？

広瀬 思い出したんじゃないって考えたんだろ。

景子 違う、その朋子じゃなくて、だから、ホンのなかの朋子！ ええい面倒臭い！

広瀬 とにかくなあ、この変更台本にや問題アリなんだよ。いいか、今のシーンの
後のほう！…そこに朋子のモノローグみてえのがあるだろ？

志津江、頁をめくり、その箇所を発見する。

志津江 「まだ薄暗いうちに私は目が覚めた。ここはどこだろう。私はここでなにをし
ているのか…」

広瀬 そう。頭のシーンのカットバックだ。ところがそれがモノローグじゃなくてダイ
アローグになっている。

志津江 頼子と…朋子…(景子を見る)

景子 …(黙って頭を掻いている)

島村 セリフ自体はファーストシーンとほぼ同じなんだけど、革倫かわりんに丙の頼子と月ふた
つの朋子が交互にしゃべってる。

志津江 そんな…だって…

広瀬 おかしいだろ？ 近永頼子は結局はひとりのはずだろ！

島村 月ふたつの姪の朋子のほうは、近永頼子の自分探しの道具でしかない。そのはず
だったんだけど…同時に出ちゃってるんだ。

志津江 …。

広瀬 それだけじゃねえ、近永轎子を監視する俺たちのキャラクターまで変わってる。しゃべりかたもくだけで、これじゃまるで…俺たち自身みたいな話し方だろ。

景子 そうよね…。

広瀬 納得できん！俺は断固として納得いかん！いったいなに考えてんだよ！ええ？景子 あたしに言われたってわかんないわよ。

広瀬 だいたい今日はなんでいねえんだ、どこほつつきあるいてんだよ、アイツは！うるさいわね、耳元で怒鳴らないでよ！！綾ちゃん連れて小屋の下見よ。

広瀬 小屋の下見イ？

島村 小屋決まったの？

景子 まだわかんないけど…マスターが紹介してくれたとこ。

島村 とにかく座長はやる気なわけだ…。

やや問あり。

島村 どうする？

広瀬 なにが。

島村 確かにこの変更部分は謎が多すぎるし…。座長に頼んで説明してもらおうか。

広瀬 バカヤロウ、なに言ってるんだ！

島村 はあ？

広瀬 座長に文句言ってるヒマがあったらとつとセリフおぼえりゃいいんだよ！

島村 …。

広瀬 納得いかなきゃ答えが出るまで考える！答えがなければ自分で無理矢理にでも作る！それが俺たち役者の心意気ってもんだろっつが！

島村 オマエ…どっちなんだ。

広瀬 さあ続きた。やるぞっ！…シーちゃん、俺セリフ危なっかしいからプロンプ！

志津江 はっ、ハイ…

景子 なんなの、アンタ…。

彩、登場。

景子 あれ、お帰り！ずいぶん早かったんじゃない？

彩 ええ…あれっ、シーちゃん！

志津江 (ペコリ)おはようございます。

彩 戻ってきたんだ、ちようどよかった…。

志津江 え？

景子 朋子は？マスターも一緒じゃなかったの？

彩 マスターは先に帰りました。今日は店開けないから、一日稽古に就いていって。

広瀬 お。

島村 ラッキー。

彩 それで…朋子さんが…

景子 朋子どうしたの？小屋見たんでしょ？

彩 あの小屋でいって。

景子 あ、そう、気に入ったんだ。

彩 それで、座長からの伝言があるんですけど。

島村 伝言？

広瀬 伝言であいつはどこ行ったんだよ。

彩 (首を横に振る) わかりません。とにかく…一週間後にこの小屋で打つからそのつもりでいてくれって…

一同 なにッ！ (的な声)

景子 打つって…公演を！？

彩 って景子が絶対訊くから饅頭打ってどうするんだと突っ込め、と。

広瀬 あのなあ…冗談なのかそれ！？

彩 って広瀬が畳みかけてくるから、あたしは芝居のことで冗談は言わない、と切り返せ、と。

島村 …(俺のぶんは？ と自分の顔を指す)

彩 島村はこういうときはなにも言わないから放っておいてよし、と。

一同 …。

彩 とにかくそのことを確実に劇団員全員に伝えるように。細かい指示は追って伝える、とにかく大事なことは、当局に公演を嗅ぎつけられないようにすること、秘密厳守でヨロシク。と。

一同 …。

彩 以上。

広瀬 以上って、おい！

彩 だって以上なんですもん！ あたしに文句言われても…。

景子 参ったな…。本気みたいね。

島村 うん。

広瀬 納得いかん！ 座長連れてこい！ どういうことだか説明させい！

島村 さっきと全然違うぞ。

広瀬 うるせーうるせー！ わからないことがあったらまず座長に聞けっっておじいちゃん の遺言なんだ！

志津江 きっと朋子さんなにか考えがあるのよ。

広瀬 だからそれはどんな考えだって…

景子 いい加減にしな。いいからあたしらはできることをやる。ホラ、彩ちゃんも台本持つて。もう一回ホソ読みしよ。シーちゃんも。

景子の仕切で車座になって読み合わせを始める。

*

別の場所

朋子と晶子が立っている。(この間、稽古場組は暗転退場)

晶子 …まだ薄暗いうちに私は目が覚めた。ここはどこだろう。私はここでなにをしているのか。答えはない。硬く冷たい床が私の裸足の足を押し返す。寒くもなく暑くもなく、何の物音もしない。

朋子 …ここはどこだろう。私はこの暗がりの中でなにをしているのか。身動きひとつせず、まだ遠いところにあるような自分の体を手探りで確かめながら、私は私に繰り返す。

晶子 ここはどこだろう。私はここになにをしているのか。まるで死に絶えた枯れ木に
嘴を立て続ける啄木鳥のように繰り返す。

朋子 私は本当に目覚めているのだろうか。私はまだ夢の続きを見ているのか。
晶子 それとも夢と現実のはざまを、

朋子 止まりたくても止まることができずに嫌々ながら揺れ動いている振り子のように、
晶子 行ったり来たりしているだけなのだろうか。

朋子 これは誰の記憶なのか。
晶子 これは誰の記憶なのか。

朋子 私は誰なのか。
晶子 わたしは今どこにいるのか。

朋子 わたしのなかで囁く声がする。
晶子 わたしは誰なのか。

朋子 わたしは誰なのか。
晶子 わたしは誰なのか。

朋子 わたしは誰なのか。
晶子/朋子 貴女は、誰なのか…。

やや間あり。

晶子 わたし、少しわかりかけてきた。

朋子 そう。
晶子 わたしはあの小さな島で生まれた。そしてわたしはあの光景を見た。

朋子 そうよ。
晶子 そのときからわたしはすべてを忘れたんだ。

朋子 貴女はふるさとを忘れた。
晶子 名前のない島で生まれたわたしは、名前のない記憶を水底に眠らせたまま長い長
い時間を過ごしてきた。

朋子 そして…

晶子 そして私たちは出会った。波音だけが昼と夜を分かち、鉄格子の影が時の流れを
舐める長い舌のように床を舐めまわす、あの暗い部屋で…

朋子 貴女は誰なのか。
晶子 貴女は誰なのか。

朋子 貴女はわたし。
晶子 わたしは…貴女の…影…
朋子 わたしは、…佐伯朋子。

晶子、暗転退場。
朋子ひとり残る。

朋子 …佐伯…朋子…。

彩、登場。

彩 朋子さん…。

朋子 (我に還る) うん。
彩 みんなに伝えました。

朋子 劇団員全員ね？

彩 はい、全員。

朋子 ありがと。それでいいわ。

彩 あの…みんな心配そうでしたよ、座長のこと…。

朋子 あたし？ あたしはだいじょうぶよ。ちゃんとわかってるわ、自分のことは…はい。

朋子、綾に手を振って退場。

彩残る。

やや明かり変わる。

根岸、登場。

根岸 彩ちゃん。

彩 …。

根岸 彩ちゃん？

彩 ん？ ああ、ごめん。

根岸 どうしたのぼおっとして。

彩 (首を横に振る) ううん、なんでもない。

根岸 なんか心配事？

彩 …。

根岸 劇団のこと？

彩 そういう話はナシって約束でしょ？

根岸 そうだね。

彩 劇団では絶対秘密なんだから。

根岸 うん、わかっている。彩ちゃんのしゃべりたくないこと、訊かれたくないこと、今まで僕が聞き出そうとしたことあったか？

彩 …(黙って首を振る)忙しいの？

根岸 いや、そうでもないよ。最近あんまり公演もないしね。やっぱり芝居やる人たちが減ってるんだろうな…。なんか…複雑な気分だけど。

彩 …。

根岸 だいじょうぶ？

彩 …うん。

根岸 今日はバイトないんだろ？ じゃ、なんか食べに行こう。

彩 うん。

ふたり、連れだって退場

暗転

ACT.7 招待状

薄暗い劇空間。
椅子に朋子が座っている。

朋子がすうつと腕を上げ、指で指し示した空間に、明かりが落ちる。
朋子はその作業を何度か繰り返し、舞台の明かりを様々に変化させていく。
それに飽いた朋子は自分の手を見つめている。

竹内登場

朋子（気配に顔を上げる）いらっしやい。

竹内 …。今日は一人芝居ってわけなの？

朋子 さあ、どうかしら。

竹内 どうやら…

朋子 …。

竹内 見事にだまされたみたいね。

朋子 あなたを待っていたのよ、竹内さん。

竹内 …。

朋子 公演の情報を流せば、必ずあなたはやってくる…。あたしの思った通りだった。

竹内 …。

朋子 そう、今日ここであたしたちが芝居を打つていうのは嘘。あなたがここに現れるのを確かめたかったの。

竹内 他の劇団員は？

朋子 （首を横に振り）ここにはあたしとあなたと、それからもうひとりだけ呼んであるわ…。

竹内 …。

竹内 …。

志津江、登場。

竹内 …。

朋子 安心したでしょ？ 搜索願は取り下げになったとはいえ、親元に帰ろうとしない

姪の元気な顔が見られて。

竹内 佐伯さん。

朋子 わかっていたのよ。最初から。あの日の朝、この子が留置所を出るあたしたちを迎

えに来ていなかったこと。どうして劇団をやめようと思ったのか？ それで調べ

たの。

志津江 朋子さん、違う…

朋子 それを確かめたかったのよ。だからここで公演を打つていう情報を劇団のなか

だけに流したの。

志津江 違う！ 朋子さん、あたしなにも言っていない…！

朋子 どうでもいいのよ、シーちゃん、そんなこと。

志津江 朋子さん、信じて！ 違うって言つてよ！ 叔母さん！

竹内 佐伯さん、あなたがどう思うか知れないけど、この子はスパイじゃないわ。

朋子 どうでもいいのよ、それは。もうそんなことは。…ねえ竹内さん。

竹内 なに？

朋子 あたしあなたに言った。この芝居だけは必ず最後までやるって…。憶えてるでしょ。

竹内 ええ。

朋子 あなたにこれを渡したくて、ここで待っていたの。

朋子、竹内に近寄り、一通の封書を手渡す。

朋子 招待状よ。それがわたしの最後の芝居。

志津江 朋子さん…。

朋子 客はあなたひとり。他には誰も呼ばない。

竹内 ……ずいぶん警沢な見世物ね。

朋子 ええ。たったひとりの招待客よ。どう？ それでも演劇禁止令はわたしの芝居を潰す？

竹内 微妙なところね。…公の場で行われること、定額・カンパに関わらず料金発生の可能性があること、関係者以外の人間が観覧可能なこと、今のところ演劇興行の法的解釈はその三点よ。観客の人数には関係ない。わたしの考えでは…これは（封筒を掲げて見せる）ギリギリアウトね。

朋子 （笑って）だったらあなたは尚更こなきゃならない。この芝居を潰すために。

竹内 ……

朋子 待ってるわね、竹内さん。

朋子、身を翻して去ろうとする。

志津江 朋子さん！ あたしも…あたしもその芝居に出ます！

朋子 ……

志津江 出してください…！ お願いします。

朋子 もちろんよ、シーちゃん。あなたには特別重要な役が用意されてるんだから。

志津江 ……

朋子、退場。

志津江、追つ。

竹内 志津江ちゃん！

志津江 ……

竹内 ダメよ。彼女について行っちゃだめ。

志津江 ……。叔母さん。……ごめんなさい……

竹内 志津江ちゃん…

志津江 ……見に来て。わたし、叔母さんに見てほしかった。舞台のわたしを…。見に来ててください。

竹内 ……

志津江、退場。

竹内、退場。

喫茶「小山内」。

広瀬、島村登場。

芝居の準備作業をしている。

島村 んで、結局どこでやるわけよ？

広瀬 だから座長が見つけてきた小屋だろ…。

島村 その…前の座長が住みついていたという稽古場？

広瀬 うん。結局会えなかったらしいけどな。

島村 じゃ許可なしで台本変更に踏み切ったわけだ？

広瀬 そのへんはつきり言わねえんだよアイツ。とにかく問題なくなったから心配しなくていいとさ。

島村 四係の竹内に挑戦状叩きつけたんだって？

広瀬 挑戦状じゃなくて招待状。ったくなにを考えてんだか…。

島村 潰してくださいって言うてるようなもんだぞ。

広瀬 それがな、今回の公演は演劇禁止令には引つかからないからだいじょうぶなんだってよ。

島村 ひっかからないわけないだろ。

広瀬 警察の法律解釈じゃ観客がひとりもない芝居は演劇興行とみなされない、だからだいじょうぶなんだってよ。

島村 だってひとり呼んじやってんだろ？

広瀬 座長がそう言うてんだからしょうがねえだろが。

島村 おまえさん、今回はやけに落ち着いてるね。

広瀬 …。座長がな、竹内に啖呵切ったときに、これがあたしの最後の芝居だ、って言ったそうだ。

島村 …。

広瀬 俺ももちろん認めねえよ、ただワエがそこまで言うてる以上、俺らは黙ってついていだけだ。そうだろ。

島村 オトコっばいねえー。

広瀬 そう？（ちょっと照れる）

島村 いや、座長が。

広瀬 …。あ、そうだ。オマエの言ったの、ひとつ当たってたな。

島村 なにが？

広瀬 近永晶子役、シーちゃんがやることになったんだ。

ゲレル、缶コービーとマウンテンデューを持って登場。

ゲレル はい、お待たせ。（ふたりの作業を見て）やってるねえ。

島村 （コービーもらつ）（どつも）

広瀬 …！（マウンテンデューをもらってギョッとして）

島村 マスター、たまにはちゃんとコービー淹れてみたら？

ゲレル うーん、淹れ方わかんないから。

島村 …。

暗転。

波の音。

千葉勝浦海岸の病院。

空の椅子がひとつ。

もうひとつの椅子に顔色の悪い老人が座って居眠りをしている。
志津江（晶子として。以降「晶子／役」と記す）が登場。
窓の外の海を眺めている。

景子（看護婦として）登場。

景子 晶子さん。

晶子／役 …（黙って頭を下げる）

景子 よくお休みになってますよ。

晶子／役 そうですか。安心したんだと思います、きつと。

景子 ずいぶん長いことおしゃべりなさってたんで、ちよつと心配してたんですけど…。

とても気分の良さそうな寝顔で。

晶子／役 ええ…長くなって…不思議な話でした…。

景子、ひとつお会釈をして去ろうとする。

晶子／役 あの…。（景子振り返る）天皇へイカって、昔はそんなに偉かったんでしょ
うか？

景子 あら…。今だって偉いんじゃないかしら？ だってついこの間まで、大喪の礼で

たいへんだったでしょう？

晶子／役 ええ…。

景子 いろんな書類とか、面倒なのよね。今年からへいせいだって言われても、ねえ。

晶子／役、曖昧に頷く。景子、退場。

老人 やつと…。

晶子／役 …。

老人 これで終わったのかもしれない。昭和が終わって…三十年前にあなたのお祖母さん
がしようとしたことも…。

晶子／役 あの…失礼ですけど…。

老人 話を聞いたんだね、お祖母さんから。近永頼子さんのお孫さんだろ？

晶子／役 … 晶子です。

老人 それなら、ピカドンが落ちた広島にあの人を送り出した挺身隊長のことを聞いて
たね？

晶子／役 ええ…。

老人 …それはわしだ。

晶子／役 …。

老人 驚いたかい。わたしも驚いたよ、あんた若い頃のあの人にそっくりだ…。

晶子／役 祖母を見舞ってくださったんですか。

老人 いやいや、違う。あの人があの事件を…いや、もう口を憚ることもあるまい、畏
れおおくも先の天皇陛下を弑し奉らうとして、この病院に入れられたとき…今か
ら三十年前…わしはもうここにきていた。

晶子／役 …。

老人 といつても病気じゃないさ。もつ三十三年間、毎週一度はここにきている。あ
んたのお祖母さんがここに来たときは、なんとという偶然かとそりゃあたまげた…。
晶子／役 誰かのお見舞いに？

老人 ……そこだよ（指さす）あんたのお祖母さんの隣の部屋よ…

老人が指さした入り口から、若い女が登場する。
本やノートを持った朋子である。

朋子 ……（黙って晶子／役を見ている）

晶子／役 ……コンニチハ。

朋子 ……

晶子／役 ……この子のお見舞い？

老人 いやいや、違うさ。佐伯朋子という。お祖母さんと同じ名前だな。生まれて間もない頃から知つとる。かわいそうに二十歳のとき気がおかしくなつてここへ入つた。昭和二十四年…。あんたのお祖母さんがここにくる三年前だ。

晶子／役 ……

老人 この子はわしの子でな、同じ名前をつけてやつたんだよ。なあ、朋子。

朋子 ……

老人 まだ十六歳だが、ほね、なにやらもの書くのが好きで、ここに来るとあちこち部屋を行つたり来たりしながら帳面にかじりついてなにか書いてるよ。

朋子 ……

老人 さあ、…そろそろお暇いとましような、朋子や。

老人、去りかける。

晶子／役 ……あのおじいさんのお名前…うかがっていいですか？

老人 おや。お祖母さんから聞かなかつたかね。わたしは山下といひますよ。山下浩三…。

老人、退場。
朋子、残る。

朋子、残る。

晶子／役 ……やました…

朋子、つぶやく晶子／役を強い視線で見ている。
手垢で汚れたノートを開き、しかしそのノートには目を落とさずに朋子はしゃべり始める。

朋子 ……そのとき晶子は祖母からすべてを聞いた。それはひとつの物語。広島に生まれ、天皇を暗殺しようとした女の長い物語。でもそれは片方の物語でしかない。ひとつの挿話でしかない。

晶子／役 ……あなたは…

朋子 晶子は本当にこの病院を訪れたのか。もしかしたらそれも、近永頼子の精神の奥に狂気を見いだそうとする者たちが作ったまぼろしだったのかもしれない。

看守（広瀬、島村、景子）登場。

広瀬 やつとすべてを話してくれたね。

島村 あんたに孫なんかいない。

広瀬 われわれは聞きたかつた。

島村 君の精神の物語が。

景子 そこにあるべき狂気の種を見つけるために。

朋子 そう、それも有りうる。ここではすべてのことが有りうる。ここはわたしの世界だから。

晶子／役 ……朋子…あのお爺さんの娘…山下、朋子…？

朋子 ……いいえ。わたしは朋子。ただ、朋子よ。

晶子／役 でも…あのお爺さんは…

朋子 平成元年にこうしてあなたと会つときまで、あの男に育てられた。ほかにはこの病院の入院患者しか話相手はいなかった。学校も行かされず、ただあの男のそばにいた。あの男が佐伯朋子にしたのと同じこと…。東京にあの男の息子夫婦が、本当の家族がいることさえ知らなかった。

晶子／役 ……

朋子 あの男。山下浩三。白い顔の男。大久野島の兵器工場に勤め、孤児だった佐伯朋子連れだし、広島市で挺身隊長を勤め終戦を迎えた男。山下姓を継いだ娘は他にいる。

晶子／役 ……それは…

朋子 それはあなたかもしれない、そうでしょ、志津江ちゃん。

晶子／役 ……

朋子 佐伯朋子が入院した年に山下浩三は結婚し、次の年に子供が生まれる。昭和二十三年。男の子だった。その二十四年後、昭和五十五年。その男の子は娘をもうけた。山下志津江。

志津江 嘘よ…。

朋子 そう、嘘よ。全部がね。そして全部が本当…。

朋子、指を振り上げる。

明かりが変化し、看守たちが颯と動き位置を変える。

近永晶子登場。(以下晶子)

朋子 近永晶子はわたしに近づいた。わたしはじめて自分の書いた物語を彼女に見せた。なぜなら彼女はわたしの知らない世界、演劇という世界を知っていたから。

晶子 朋子ちゃん、あなたすごい才能があるわ。本当よ。あなたの書いたこの物語、わたしに芝居でやらせてくれない？

朋子 彼女は劇団を持っていた。わたしと晶子は共同ペンネームを使い、いくつかの脚本を書いた。

志津江 進藤正之…。

晶子 朋子ちゃん、東京に来てあたしと一緒にやろう。あなたなら絶対成功する。

朋子、指を振り上げる。

明かりが変化し、看守たちと晶子が位置を変える。

山下浩三(白い顔の男。以下山下。ここでは白塗り無し)再登場。

山下 朋子…朋子や…

朋子 わたしは怖かった。この男から逃げ出したかった。でもそれができなかった。たったひとりの肉親…そしてこの男のわたしに対する執着心…。それがわたしを縛っていた。

志津江 ……でも…母親は？ あなたの母親は？

朋子 わたしの母は…佐伯朋子。大久野島の光景から一生抜け出せなかった女。

志津江 佐伯朋子…。それじゃあ…

朋子 この男が、大久野島から連れだして自分の娘のように育ててきた女に産ませた、それがわたし。

晶子 あたしね、あなたにあたしのやっつてる劇団をいっしょにやって欲しいのよ。女だけの劇団だけど、楽しいわよ。あたしが引退したらあなたを次の座長にしたいくらい。

朋子 佐伯朋子が四十五歳、山下が六十三歳のとき、わたしはこの病院で生まれた。

山下 朋子や…今日はまたお母さんの病院に行こう。ほら、オマエの大事な帳面を忘れるなよ。

朋子 佐伯朋子とはとぎれとぎれにわたしに話をした。彼女が意識の下に押し込めていく光景。島で作られるイペリット、ルイサイト、ジフェニールシアンアルシン、ホスゲン、青酸…。工場で働く人たちが何人も、そういう糜爛性の神経毒にやられ、皮膚から血と膿を流し、苦しんで死んでいった。母の語るそういうイメージが、わたしの体に染みこんでいった…。

晶子 残念だわ。朋子ちゃん。芝居の世界にあなたを連れ出したかった。わたしの劇団でいっしょにやりたかった…。

朋子、指を振り上げる。

看守たちと晶子、白塗り男が位置を変える。

朋子 さあ、あなたの出番よ。志津江ちゃん。あなたがわたしのかわりに、その劇団のあとを継いだ。

志津江 朋子さん…！

朋子 思い出しなさい。そして演じなさい。あの病院を訪ねた日のことを！ あなたの役は山下志津江なんだから！

志津江 朋子さん、あたしは！

舞台奥から声がかかる。

竹内 待ちなさい！

以下のことが殆ど同時に起こる。

看守たちと晶子、白塗り男が位置を変える。
竹内、登場。
朋子は志津江の背後にまわり志津江の腕をとり、ナイフを志津江の首元に当てる。

竹内 …この公演を中止しなさい。

志津江 あたしは…平成…十年…この病院に…

竹内 ナイフを捨てなさい。

志津江 この病院に来た…千葉のお祖父ちゃんが…ここで…

竹内 ナイフを捨てなさい、佐伯さん。
志津江 ここで亡くなったから…そのとき…座長に…晶子さんに…出会った…。朋子さんに会うためにあの病院に通っていた晶子さんは、お祖父ちゃんとも顔見知りになっただけだから…

竹内 もういちどいいます。公演を中止して、そのナイフを捨てなさい。

朋子 どうして中止しなきゃいけないの？

竹内 演劇禁止令に違反しているからです。

朋子 これが演劇ならこのナイフは偽物の小道具。そうじゃなくて？
志津江 そのときは…気がつかなかった…離れたところに…じっと黙って立っ
た…朋子さんの姿…

竹内 とにかくナイフを捨ててその子を自由にしてちょうだい。話はそれから…
朋子 話はもう始まっているし、誰にも止められない。

志津江 晶子さんと…親しくなって…芝居を始めて…
朋子 それにね、竹内さん。あなたが言ったのよ。関係者以外の人間が観覧不能なら、
それは演劇とはみなされないって。

志津江 … 晶子さんが結婚して芝居をやめたとき…あたしが座長になった…平成十三年

竹内 … あなたはわたしに招待状を渡した。つまりわたしという観客を呼んだ。これは演
劇行為に該当します。

朋子 令状…見せてちょうだい。

竹内、令状を取り出す。

朋子、指を振り上げる。

看守たち動いて竹内の令状を取り上げる。

志津江と朋子は位置をかえて向かい合う。

朋子のナイフが志津江の喉元にピタリと狙いをさだめる。

竹内 志津江ちゃん！

朋子 動かないで。もしこのナイフが本物と思うなら。

竹内 …

朋子 安心しなさいよ。このナイフは小道具…。あなたのその令状が小道具なのと同じ。

竹内 なにを言ってるの…

朋子 広瀬！ そこになにが書いてある！

広瀬 … なにも。

朋子 白紙でしょう。竹内さん、あたしは観客を呼んだつもりはない。だってあなたも
登場人物なんだから。

竹内 …

朋子 景子！ あんた言ったでしょう。いったいなんのためにこんな法律があるのか。
そうよ。バカげてるでしょう？ そんなばかげた法律があつて、そのことを誰も
疑問に思わない。それがなによりの証拠。ねえ景子。あなたは誰？

景子 …

朋子 あなたの頭のなかにあるのはなに？ セリフ？ 次の段取り？ そこにはなにが
あるの？ その紙にはなにが書いてあるの？ あなたも登場人物なのよ。

志津江 平成十四年…劇団にひとりの女性が…やってきた…

朋子 あの男が死んで…そうあたしはあの男を殺せなかった。自分を縛っているものを
断ち切れなかった。近永頼子が天皇殺しに失敗したのと同じように…あたしも。

朋子、志津江からナイフを外し、竹内に向ける。

朋子は志津江から離れゆっくりと竹内に向かって歩いてゆく。

景子、広瀬、島村、秋山（山下）、晶子が床にゆっくりと崩れ落ち、黒い塊となって
いく。

志津江 その女性は…佐伯朋子と名乗った…進藤正之名義の台本の、もうひとりの原作
者だった…

朋子 どこかで見ているんでしょ！ 竹内！ 二階にいる竹内はあなたの影法師！
ただの登場人物！ 出てきなさい！ 一人芝居じゃ寂しいわ！

朋子はナイフを自分の首に突きつけ、外の世界に向かって呼びかけている。

朋子 この世界を、あなたのために作ったこのとっておきの演し物をどこかで見て
んでしょ！ あたしの招待状、届いているでしょ？ こなければ志津江をこ
で殺すって。最後まであの男に縛られて、外に出ることを禁じられて、でも今全
部をひっくり返すわ。この世界で本物なのはこのナイフだけ。さあ、出てきて！

志津江 朋子さん…。

志津江、静かに朋子に近寄る。

ナイフを持った手を取り、その切っ先を自分の喉に向ける。

竹内 志津江ちゃん…！

朋子が志津江を見る。

志津江がほえむ。

根岸が舞台に飛び込む。

朋子に飛びつき、ナイフを取り上げる。

志津江を遠ざける。

竹内が志津江に駆け寄る。

竹内 志津江！

根岸 だいしょぶかい？

竹内 根岸くん、ありがとう。

根岸 はい…間に合ってよかった。

根岸、立ちつくす朋子に向かい、

根岸 佐伯朋子。山下志津江誘拐容疑で、逮捕します。

暗転

ACT.8 逮捕

四係。
竹内、根岸。

*

別の場所にひとりうつむいて死んだように座っている朋子。

*

四係に志津江が顔を出す。

志津江 叔母さん？

竹内 あら。

根岸 ああ志津江ちゃん。

志津江 いい？

竹内 いいわよ。入ってらっしゃい。

根岸 やあ、いらっしゃい。

志津江 お仕事中にごめんなさい。

根岸 いやあ全然…。

竹内 まあ座んなさい。…で、どうだったの？

志津江 うん…。

竹内 行って来たんでしよう？ 千葉の病院。

志津江 うん。

竹内 会えたの？

志津江、黙って頷く。

志津江 でもしゃべってもらえなかった。あたしの顔見ても、朋子さん…なんにも見てないよつな…

竹内 …。

竹内、志津江を慰めるように肩に手を置く。

根岸 本人、なんにもおぼえてないんですかね？

竹内 どうかしらね…。

志津江 とつてもいいお部屋だった。ちょっと古びてるけど、静かで、海の音だけ聞こえて…。ホントに朋子さんの書いた台本のまま…。

竹内 そう。

志津江 この病院ですつと朋子さん、ひとりで台本を書いていたんだなあって思って…。なんか…泣いちゃった…。

根岸 …治るといいよね。病院の先生とは話とかしたの？

志津江 (首を振る) あたしが聞いてもわからないもん。

根岸 結局、病名っていうのは…

竹内 見当識障害、極度の自閉、乖離性人格障害。そういう診断みたいね。

根岸 …。

竹内 … 志津江ちゃん、これ。

志津江 なあに？

竹内、手あかで汚れた冊子を志津江に渡す。

竹内 佐伯朋子が病院で最後に書いていた脚本。彼女が進藤正之名義で書いた最後の作品よ。近永晶子のアパートに一冊だけ残ってたの。

志津江 … 「演劇禁止令」…。

竹内 それを読めば少しはわかるかもしれない。… 彼女が自分のなかだけで作りあげて、最後にはそこから出られなくなった世界のことかね。

志津江 …。

根岸 僕も読んだんだけどね、たぶんあの人はその脚本に書かれているように世界が見えていたんじゃないかな。なんていうか、演劇禁止令っていうものが存在する、彼女だけの世界…。そう考えれば彼女のやったことも少しは理解できるかもしれないって思ったりしたよ。ただ…

志津江 …。

根岸 終わってないんだ、そのホン。最後の場面だけが白紙のままになってる…。

志津江、最後の頁を開いてみる。
そこにはただ白い未来が広がっている。

志津江 このホン…

竹内 … いいわ、あなたにあげる。

志津江、冊子を胸に抱く。

根岸 (小声で) いいんですか？

竹内 … 堅いこと言わないの。

志津江 … ちゅ…

根岸 ん？

志津江 いいの、最後のシーンはきつと、いつか、書いてくれる…。

波の音が聞こえる。

音楽。

四係の窓から空を見上げる志津江。

竹内、根岸、目配せし合って部屋を出ようと立ち上がる。

音楽が高まる。

刹那。

音楽が唐突に途切れる。
声が飛ぶ。

捜査官 そこまで！

竹内たちの動きが止まる。
客席側より捜査官が登場(晶子)。

捜査官 全員その場を動かないように！

各出入り口から数人の捜査官が登場し、竹内たちを取り囲むように退路を塞ぐ。
(広瀬、景子、島村、彩、秋山、ゲレル)

竹内たちは信じられないものを見るように、近寄ってくる捜査官(晶子)を見つめている。

捜査官(晶子)が舞台の前に立つ。

誰ひとり、動くものはない。

*

別の場所で、朋子の顔がゆっくりとあがる。

その顔は覚醒したばかりの人のように、穏やかさと幼い驚きと、そして生きる力に満ちている。

朋子 …あなたたちを、逮捕します。

朋子の顔にうっすらと刷いた笑みが浮かび、彼女以外のすべての人物が闇に消えていく。

やがて終幕の音楽とともに、朋子の姿も溶暗する。

幕